

## 第10回

### 海外帰国子女シンポジウム

# 「海外転勤、その時高校生は」

1999年11月17日実施

主催 帰国子女の会 フレンズ  
後援 東京海上火災保険株式会社

## 目 次

I	開催要項	3
II	パネリストのプロフィール	4
III	開会あいさつ	
	帰国子女の会 フレンズ	5
	東京海上火災保険株式会社	6
IV	シンポジウムの記録	
	パネルディスカッション	
	「海外転勤、その時高校生は」	7
V	資料	

## 開催要項

主催 帰国子女の会 フレンズ  
後援 東京海上火災保険株式会  
日時 1999年11月17日  
1時30分～4時30分  
場所 東京海上火災保険株式会社新館15階 大会議室

## プログラム

- 1:30 開会挨拶 帰国子女の会 フレンズ 代表 渡辺 紀子  
東京海上火災保険株式会社  
営業開発第一部長 矢野 孝明
- 1:45 パネルディスカッション  
パネリスト 松本 輝彦 シグマ・スクール 学園長  
林田 任弘 会社員  
針間 浩彰 大学3年生  
笠原 彩子 大学3年生  
小林 岳人 大学4年生  
高畑 恵 大学1年生  
藤澤 淳郎 大学4年生
- 司会 高田 和子 フレンズ スタッフ  
諏訪 美草 フレンズ スタッフ
- (敬称略)

3:15 休憩 ・ 質問用紙受付

3:30 パネルディスカッション  
質疑応答

5:00 閉会

## パネリストのプロフィール

松本 輝彦氏	シグマ・スクール 学園長 (アメリカ ロサンゼルス在住 )		
	1980～1985年	ロサンゼルス補習授業校 あさひ学園	
	1987年	育英セミナー設立 (ロサンゼルス)	
	1994年	シグマ・スクール設立 (ロサンゼルス)	
林田 任弘氏	会社員		
	1992～1997年	ドイツ デュッセルドルフ	
		長女：高2～高3 国際校 次女：中2～高3 日本人学校、国際校	
針間 浩彰氏	私立大学 3年生 (アメリカ現地高校経験者)		
	1993年 4～7月	日本	公立高校 高1
	1993～1996年	アメリカ メリーランド州	現地校 高1～高3
笠原 彩子氏	私立大学 3年生 (イギリス現地高校出身者)		
	1991～1992年	日本	私立中学校 中1～中2
	1992～1995年	イギリス ロンドン	現地校 中2～高2
	1995～1997年	日本	私立高校 高2～高3
小林 岳人氏	私立大学 4年生 (インターナショナルスクール出身者)		
	1977～1984年	マレーシア クアラルンプール	0才～6才 1992～
	1993年	マレーシア クアラルンプール 日本人学校	中3
	1993～1995年	マレーシア クアラルンプール	国際校 高1～高2
	1995～1996年	インドネシア ジャカルタ	国際校 高2～高3
高畑 恵氏	私立大学 1年生 (在外私立高校出身者)		
	1986～1992年	ベルギー ブラッセル	現地校 小1～小6
	1993～1996年	日本	私立中学校 中1～中3
	1996～1999年	イギリス ウェストサセックス州	在外私立校 高1～高3
藤澤 淳郎氏	私立大学 4年生 (国内高校出身者－単身残留)		
	1983～1984年	香港	日本人学校 小1～小2
	1984～1985年	アメリカ ロサンゼルス	現地校 小2～小3
	1985～1988年	アメリカ ワシントン DC	現地校 小3～小6
	1988～1991年	日本	公立中学校 中1～中3
	1991～1994年	日本	私立高校 高1～高3

## 開会あいさつ

帰国子女の会 フレンズ

代表 渡辺 紀子

本日はお忙しい中、多くの皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。毎年、恒例となっております私どもの海外帰国子女シンポジウムも、今回で第10回目を迎えることができました。これもひとえに、初回より毎回ご講演頂いております東京海上様はじめ、賛助会員企業の皆様、そして多くの方々の長年に渡るご支援の賜とフレンズスタッフ一同こころより感謝申し上げます。

今まで9回のシンポジウムも、私どもの活動を通して、今何が問題かを感じテーマを選んで参りました。そして私どものシンポジウムの特徴は、それらの問題を当事者である帰国子女本人たちがどんな体験をし、どんな思いを持っているかを聞き、解決の糸口にしようとしてきたところにあると思っています。

今回「海外転勤、その時高校生は」をテーマに選びましたのは、私どもに寄せられる相談はこのところの経済不況で駐在員が減少していること、またいろんなところで情報が取れるようになったということもあり、減ってきていますが、高校生のいる家庭からの相談は増えており、私どもの受ける相談の半分近くになっているということにあります。

この問題は、以前から海外にはいわゆる日本人学校がないということもあり、この年齢のお子さまを持つ家庭にとりましては、深刻な問題でしたが、日本の受け入れ大学の増加などに伴い、最近は帯同したいと考える家庭も増えているように感じます。

「高校生を連れていくのは無理だといわれたが、家族は一緒に住みたいので何か方法はないか」「せっかくのチャンスだから、現地校に入れていろいろな体験をさせたいと思うが、やっていけるだろうか」「希望の高校に入れ、海外には行きたくないと言っているが、一人残すのも心配だ」など様々な、相談が寄せられます。

特に初めての海外転勤でこの年齢のお子さまをお持ちの方々の悩みは大きいです。

実際に現地校、インターナショナルスクールに入りましても、学習面におきましても、友達を作ることに関しましても低年齢の子供たちに比べて困難が多く、本人の努力も相当なものが求められます。

しかし私どもはいろいろなケースをみておりますと、それを乗り越えたときの実りも大きいよう感じています。

そこで、例年と同じように当事者である子供たちをパネリストとして迎え、それぞれの状況下で親の海外転勤をどうとらえ、どのような選択をし、どんな体験をしたのか、そして今そのことをどう感じているのかなどを語ってもらい、その思いに耳を傾け、私たち大人は彼らをどう支えていけばよいのかを皆様とご一緒に考えたいとこのシンポジウムを企画いたしました。

パネリストには現地校、インターナショナルスクール、在外私立校、国内に単身で残留とそれぞれ異なった選択をした5人の学生さん、そして、実際に中学生と高校生のお子さんを海外に帯同されたお父様、また、ロスアンゼルスで長年、日本の高校生の指導にあたっておられる松本先生にお越しいただきました。松本先生にはお忙しいところ、私どものシンポジウムのために多大なご厚意でロスアンゼルスより駆けつけて下さいましたこと感謝申し上げます。

これからの3時間、パネリストの方々のお話を私どもも楽しみにしております。皆様からも活発なご意見をお願い致します。

簡単ではございますが、開会のご挨拶とさせていただきます。

## 来賓あいさつ

東京海上火災保険株式会社  
営業開発第一部長 矢野 孝明

只今、ご紹介いただきました東京海上の矢野でございます。本日はお忙しい中多数お集まり頂きまして、本当にありがとうございます。このシンポジウムは帰国子女の会フレンズ様が主催しておられまして、私ども東京海上が後援をさせていただいております。

フレンズさんと私ども東京海上との出会いは、今をさかのぼる 13 年前、1986 年と聞いております。当時フレンズさんは設立後約 3 年経っておられたそうで、奥様方のボランティアとして、海外生活の実体験あるいは帰国後のいろいろなご経験をもとに、具体的な相談にのられたり、情報提供を様々な形でやっておられました。私ども東京海上は安心と安全の提供が企業理念でありまして、保険業務以外でも何か社会のお役にたてることがないかということを考えております。当時日本企業の海外進出ラッシュの中で、企業の従業員の方が海外赴任をされ、それに伴い教育、医療などいろいろな問題などが起こってくる事となり、そういうところで情報を提供するなど何かサービスができないかという事を考えておりました時に、フレンズさんと出会いがございました。私どももこのボランティア活動に感銘を受け、本当にささやかではございますがご支援をさせていただくこととなり、そうした関係が今まで続いているということでございます。

今日のシンポジウムはさきほどご紹介ありましたように「海外転勤、その時高校生は」というテーマで、いくつかの異なったご経験をされた子供たちが、その色々な状況のもとで、どういう事を思ったり、どういう事を考えたり、どんな生活を送ったのかということをお伺いしたいという目的で企画されたと聞いております。こちらにおられますパネリストには、いろいろなご経験をされた学生の方々、保護者の方、また先生もいらしておられます。高校生と申しますと子供の中でも一番多感な時期で、私も子を持つ親でございますが、こうした時期の子供にどういう風に接すればいいのか、あるいはどんな教育をしていけばいいのかという事で、悩みはつきないものでございます。本日のシンポジウムが出席の皆様様の御協力によって、実り多いものになる事を私どももお祈り申し上げます。

以上簡単ではございますがご挨拶にかえさせて頂きたいと思っております。本日は多数の皆様にご参加いただきまして本当にありがとうございました。

# パネルディスカッション

## 「海外転勤、その時高校生は」

司会　では、これからディスカッションに入ります。慣れない司会ですので、何かと不手際があるかと思いますが、どうぞお許してください。本日のテーマは、「海外転勤、その時高校生は」ということですが、海外転勤が決まった時に高校生を持つ親としては、やはり学校のことをはじめ、いろいろな心配事があると思います。そのような場合にどのような選択肢があるのか、また、そういうものを選択した場合にどういう事態が待っているのか、その辺を子供の立場から、親の立場から、先生の立場から、いろいろ具体的にお話していただきたいと思います。では、はじめに自己紹介を兼ねまして、パネリストの方々に簡単にお話していただきたいと思います。はじめに、大学生の皆さんにそれぞれの選択の理由、それからどのような高校時代を過ごしてきたか、などについて話していただきたいと思います。まず、藤澤さんからお願いいたします。

藤澤　ただいまご紹介にあずかりました、藤澤淳郎です。私は、小学校の1年生から中学の1年生まで約6年間、両親と一緒に海外に暮らしました。このプロフィールの一番下ですが、1984年から88年までアメリカに行っておりました。それから日本に帰ってきて、中学の3年間は日本で暮らしました。高校1年の時に、親が再びアメリカに転勤になり、その時に、私は悩んだわけですが、日本に残って一人で暮らしていこうと決断し、高校3年間は寮で暮らしました。そういう訳で、私には海外に行った経験と、また日本に残って、一人で生活した経験の両方があります。今回は他のパネリストの方はみなさん、ご両親とともに海外について行かれたということで、私は、日本に残った場合に子供がどういった思いになるのか、勉強などいろいろな面で、どういったことがあるのかをお話しできればと思っています。

寮での生活は、一人暮らしとは違って、寮母さんがご飯も作ってくれますし、帰宅すればお風呂も沸いているということで、物質的な面ではほとんど困ることはありませんでした。一人暮らしと違うところは、常に周りに多くの人たちがいるということで、人間関係の大切さ—そういった面で煩わしさを感じたこともありましたが—協調性とか、マナーとかそういうものが身に付いたと思います。よく「親はなくても子は育つ」と言われますけれども、私はほんとうにその通りだと思っています。(笑い) ただ、子供の成長というものは、バランスが大切だと今になって思います。中学生、高校生という多感な時期に、子供が一人で日本に残り全面的にやらなければならないという状況になった時に、何か起こった時に、正しい方向—軌道修正してくれるような存在がいないと、考え過ぎてすごく落ち込んでしまうとか、一つの方向に走ってしまう危険性が非常にあります。それで、私自身も結構投げやりな時期があり、部屋にこもった時期もありましたが、そういう時に親と一緒に暮らしていれば、子供が困っていたら少しは手をさしのべてくれると思いますので、そういう存在が身近にいなかったというのが寮生活で私が一番困ったことだったと思います。結果として、自分もぐれずに何とかこれまで生きてきたわけですが、それはやはり、親が海外にいても、気づかないうちにいろんな人に支えられて生きてこられたってことだと思います。以上、簡単ですが自己紹介を兼ねてお話しさせていただきました。

司会 はい、ありがとうございました。残留をお決めになったという理由を簡単に言っていただけますか。

藤澤 はい、僕はですね、ちょっと8年近く前になってしまうので記憶はちょっと曖昧なんですけども、まず、日本の中学校で3年間暮らしまして、そこで受験勉強をして日本の高校に入学でき、大学もついている高校でしたので、そういった面で、アメリカの全然違う環境に身を置くことに不安を感じたということです。さらに中学3年間を日本で過ごして、友達も出来ましたし、日本で培った人間関係や生活を、やっぱり壊したくないという気持ちもあったと思います。

司会 ありがとうございます。では、高畑さんお願いいたします。

高畑 高畑恵と申します。私は小学校の6年間ベルギーに住んでいたのですが、その6年間は現地校に通いました。幼かったのが現地校に通うという選択をしたのは両親ですけれども、小学校6年生の時日本に帰国し残りの小学校生活を公立の日本の小学校で送り、それから、何もわからないまま中学受験をして、中学校3年間は日本の私立の中高一貫校に通いました。そして中学校卒業するところになって、また、父のイギリスへの転勤が決まりました。私はそのころやっと日本の生活に落ち着いて、高校受験をせずにすむからこそ中高一貫校に入ったのという気持ちと、何よりも大きな変化を好まないという私の性格から、私の意志をあまり聞かずに、大学の二人の姉を残して私だけ一緒に連れていこうとする両親に反発の気持ちを持ったのを、よく覚えています。（笑い）そこで私の高校を選んだのも両親でしたが、最初から在外施設を考えたようです。それでもいくつかある在外施設からその高校を選んだ理由は、やはり他の高校に対する評判だったものと思います。

私の場合は、中学校と違って、高校からイギリスの現地校、あるいはインターナショナルスクールに入るのは言葉の問題だけではなく、精神的にもきついものがあるという考えが、私自身は勿論、両親にもあったので、それらの選択肢は最初からなかったのだと思います。私の高校は全寮制なので、当然、苦労は全くなかったわけではありません。具体的にいえば、細かいことを言うようですが、毎食、全校生徒が食堂に集まり、20人ほどの長いテーブル毎に、全員一斉に食事を前にするという形だったので、食べるのが遅い人も、速い人も皆そろっていなければいけなかったのが、待たせるのではなく、急いで食べるということの上に、小学校5年生の女の子から高校3年生の男の子まで、同じ量、お皿に入れられるので相当苦しいことでした。食べるのが遅かった私は、ほとんどかまわずに飲み込むように食べていたのを覚えています。（笑い）生活面でもいろいろ苦労がありましたが、私の高校で最初に、特別つらかったのはGCSEという授業でした。それはGeneral Certificate of Secondary Educationとあって、入学してすぐイギリス人の先生に、もちろんすべて英語で生物や物理や化学を教わり、それからイギリスの試験を受けるという精神的にもハードな勉強をしました。それから学期末のテストで40点以下を取ると、一つの教室に集められて追試験を受けるまでの課題を、黙々とやらせるという制度もありました。生徒の間では缶詰と呼ばれるほど過酷で辛いものでした。この追試験に合格しなければ仮進級という形になり、この次の年にまた試験を受けなければならないのです。しかし、この缶詰のおかげで進級できる人もいれば、またこの缶詰制度があるからこそ学期末テストの勉強を必死でやるということもありました。それからその他には、EFL (English as a Foreign Language) という外国人向けの英語教育がありました。そこでもケンブリッジの認定試験を受けました。これは、日本ではそこまで知られていませんが、日本の大学受験の際、使える大学もいくつかあります。このように勉



強面で苦労はありましたが、日本語で学べ、教育システムは、基本的に日本の高校と変わらないのにイギリスならではの試験を受けたり、イギリス人の先生方による授業で、英語を身につけることができるというのはとても大きな魅力だったと思います。

司会 はい、ありがとうございました。では、小林さんお願いいたします。

小林 はい、みなさん、こんにちは、小林岳人と申します。プロフィールに書いてあると思いますが、ぼくはマレーシア・クアラルンプールで生まれまして、それから幼稚園を出るくらいまで、マレーシアにいました。いったん日本に帰ってきまして、小学校6年間と中学校2年の9月ぐらいまで日本の中学校で過ごしまして、それからまた、父親の転勤でマレーシアのクアラルンプールに行きました。最初は日本人学校に4ヶ月位いて、それから現地のインターナショナルスクールに入学しました。マレーシアに行くを決めたのは、自分自身です。小学校高学年か中学校位から、自分はいずれ海外に行くのだと思いこんでいたので、それほど抵抗はなく、すんなり、父親について行こうかというぐらいの気持ちで海外に行きました。

最初は日本人学校で変化なく過ごしていたのですが、いざ高校を考える時になって、インターナショナルスクールに行くか、シンガポールの渋谷幕張高校に行くか、もしくは日本に帰るかという選択肢が発生しました。その時、日本に帰るのではせっかく来た意味がないし、日本系の高校に行くのも魅力を感じなかったのが、当然残された選択肢はインターナショナルスクールに行くことだったわけです。インターナショナルスクールに行くには入学試験があると聞き、これは大変だと思ひまして、家庭教師をつけ、一応、英語の勉強をしました。でも入学試験と言うよりは学力試験で、すんなり入ることができました。それはそれで良かったのですが、今度は入ってからが大変で、半年ぐらいは英語もわかりませんし、英語での理科とか、化学とか、物理とか授業を受けても右も左もわからないという大変な生活を送りました。その半年間には高畑さんが言われていた ESL に半年、もしくは1年近く入っていたと思いますが、その期間に基礎的な英語の学習、物理、生物などの特別な単語の意味をその授業で習ひまして、徐々に普通のレギュラーのクラスに入っていくという形式で、なんとか、そうですね、半年か1年位かけて普通の授業に慣れるようになりましてね。それからあとはクラブ活動、ラグビーとかソフトボール、野球、サッカー、バレー、いろんなものを挑戦しまして、その時のすごく楽しい思い出ばかりが残っています。授業は何となくですが、一番基礎的なところがわかるようになってから、だんだん高度なところが出来るという楽しみみたいなものも見つけまして、授業もなんとかついていけるようになり、現在に至るということですね。特に困ったことは、最初の半年間はちょっと英語がわからないとか、授業がわからないなということがあったぐらいで、あとはものすごく楽しいっていう思い出はありません。自分にとって、海外生活は貴重な体験、楽しい思い出で占められているので良かったなと思います。

司会 ありがとうございます。笠原さんお願いします。

笠原 はい、笠原彩子と申します。私は 92 年から 95 年、中 2 から高 2 までをイギリスのロンドンで生活していました。最初に父の転勤を聞かされたとき、私は「行きたくない、日本に残る」と言って抵抗しました。それは、入学したいと思っていた中学校に入ることが出来て、

友達関係やクラブ活動がすごく充実していたからです。しかし、現実を考えてみると、中学生の私にとって、ひとりで日本に残って生活することは、不可能であるとはわかっておりました。そんな私を説得するために、両親は「帰国した時にこの学校に戻って来ようね」と言って説得してくれました。また、周囲の友達の励ましもあって、次第に英語を学ぶことができるということは良いチャンスじゃないのかなと思うようになって、両親についていくことに決めました。

次に、学校の生活についてなんですが、イギリスに行くということは、イコール毎日、英語の生活が待っていると思っていましたので、現地校という選択以外には頭がありませんでした。実際には、私が中学生だったということもあって、両親が、現地の学校を前任者や知人の評判などから、考えて決断しました。私は、現地校の他に日本人学校やインター、在外私立校といった他の選択があるというのを知ったのは、現地校に通い始めてからでした。（笑い）最初に通っていた私立の現地校は、クラスに日本人が5人ほどいて、ESL や日本人のサポートという面では、大変日本人に面倒見が良くて、良い学校でした。その反面、日本人が多いので固まりすぎてしまって、ほとんど、英語を話さずに一日終わってしまったりすることもあり、また日本人だからといって、取れる科目がすごく限定されていたこともあって、私は転校したいと考えるようになりました。そのことを両親に相談して、日本人がほとんどいない私立校を探してもらいました。そして、93年の4月から妹と共に、別の日本人のいない学校に転校することになりました。ここでは日本人はいなかったのですが、過去に日本人を受け入れた経験があったので、英語が理解できないことも学校側はわかってくださり、とても親身になって私たちのことを考えてくださいました。でも、全く日本人がいなかったということで、最初の6ヶ月ぐらいはかなり不安も大きかったですし、クラスメートと話す時も、授業を受ける時もやはり、言葉の壁の厚さを感じずにいられませんでした。

転校したあと、その9月から GCSE という、高畑さんもおっしゃったのですが、共通試験を取得するためのコースが始まり、英語の理解に苦しみながらも、毎日必死になって勉強しました。そして2年が経過して、GCSE コースが終了した時に、そろそろ日本に帰るのではないかという話を持ち上がりました。最初はAレベルっていうのを、これは2年間で受けるんですが、それを頑張って1年間で取得して日本に帰ろうということも考えて、何度か学校のプリンシパルに相談したのですが、やはり、それは相当難しい選択であるという結論に達したので、帰国することに決めました。高2の9月から編入できる学校は少ないのですが、その少ない学校をいくつか探して受験しました。大学は帰国子女枠を使って受験して、今大学3年生です。

司会 ありがとうございます。はい、では、針間さんお願いいたします。

針間 針間浩彰と申します。ちょうどプロフィールの上から3番目のところですが、私は93年の8月から96年7月までアメリカのメリーランド州に住んでいました。父の転勤でアメリカに行ったわけですが、転勤が決まったのは私が高校入試を3月に終え、その半年後の7月頃でした。あまりにも突然だったので、やはり、最初はかなり反発したのを覚えています。最終的には、日本にひとりで残るとするのはちょっと難しいということと察もないところだった

ので、結局、ついていくことに決めました。アメリカに行って最初の2年間は家族と暮らしていましたが、大体3年といわれていた転勤が、突然2年で父が帰国することになりました。私はそのあと1年間学校に在籍しないと、大学受験の資格が得られないということで、どうしても残らなければいけないということになりまして、いろいろ考えて、学校の先生を通してアメリカ人の家庭を紹介してもらって、1年間弱ホームステイをしました。

学校は現地の公立高校に通ったのですが、場所的に私の高校はワシントン DC の近くだったので、外交官の子供も多く、30カ国以上から集まった生徒で構成されている学校でした。そこが家に近かったこともあります。外国人が多いということで ESL という外国人のための英語を教えてくれるクラスがあり、とても充実しているということで、そこに決めました。私はアメリカから帰ってすでに3年以上経ちますが、今考えてみてもアメリカに行けたというのは、ほんとにラッキーだったなと正直に思っています。これはなぜかという、やはり、英語が取得できたことは勿論ですけれども、それ以上にいろんな経験ができたからです。たとえば、サマースクールだとか、偶然でしたけどもホームステイとか、あとは、アメリカ人だけじゃなくていろんな国の人たちと知り合えたということも、かなりいい経験になったと思います。これからアメリカに行かれる方がいらっしゃるとは思います。私のわかる範囲でお答えしたいので、どんどん質問してください。

司会 はい、ありがとうございます。今、針間さん、一人でお残りになったということでしたけれども、おそらく今は規制が厳しく、お子さんだけで残ることは難しくなっているのではないかと思います。その辺該当なさる方は松本さんが詳しくご相談に乗ってくださるようですので、個別にどうぞ。では今、学生さんたちのお話で、親に反発したとか、親はいなくても子は育つとか、(笑い) いろいろありましたが、林田さん、親御さんの立場から、どうしてそういう選択をなさったのか、それから二人のお子さんのドイツでの生活や、進学先などをお話ししていただければと思います。

林田 はい、はじめまして、林田です。よろしくお願いたします。家族全員でどうして行ったのかというご質問だったのですけれども、家族は本来、一緒に生活して助け合っていくという姿が最も望ましいのではないかとこの考えがありました。その風俗や言葉が海外ではまったく異なりますし、子供達の教育の問題、それから現地での生活に慣れるまでは相当精神的な負担も大きいです。親も子も緊張を強いられますから、そういう場合に家族がそばにいてくれるだけで心強いということが言えます。もう一つは、日本では出来ない、数々の貴重な経験ができるということです。子供たちにとっては、特に基礎教育を終えた高校生ですから、これからの人生を考えますと、無限の可能性があるので、チャレンジできるまたとない機会ではないかという考えもありまして、連れていきました。

海外赴任時の家族の様子を簡単にご紹介して、ご挨拶に代えさせていただきます。私にとって2回目の海外赴任が、娘が二人おりますけれども、長女のほうからこれから高校2年生に、次女のほうから中学2年生に進学するという、子供達にとって非常に重要な時期と重なったのですが、今では家族全員で行けて本当に良かったと思っております。1992年の春から、5年間ドイツのデュセルドルフに駐在いたしました。その間、長女は2年間、順調にインターナ

ショナルスクールで高校生活を過ごしまして、そのあと大学は商業美術を勉強したいという本人のたつての希望で、ロンドンの大学に留学いたしました。彼女は赴任前、中学から外人の先生たちと接する環境だったためか英語についてはそれほど違和感なく、インターナショナルスクールの高校に溶け込んでいったような気がします。もちろん当初は生活環境もずいぶん変わりますから、相当戸惑いはあったようですけども学生生活をエンジョイしていたようです。

次に、次女のほうですが、最初はだいぶストレスがたまったようです。この子はそれほど英語もできませんでしたし、もともと性格が慎重なほうですから、取り越し苦労が多かったんじゃないかなという気がします。それで、中学2年生で現地の日本人学校にお世話になりまして、そのあと出来るだけ早く英語に慣れさせたほうが良いということで、中学3年生から姉のいるインターナショナルスクールに入れました。まずESLクラスで英語の特訓を受けながら、学校の授業を受けることになった次第です。それでも半年位しますとだいぶ英語にも慣れてきて、スポーツや音楽の活動に参加して友人たちもでき張り切って学校に通っていたことを覚えております。その間、姉がなにかと、学校のことなど相談にのってくれていたようで、姉が頼もしい存在だったのではという気がします。

長女のほうは現在もロンドンに残って勉強をしておりますが、次女は日本の大学に入りました。二人ともに、多感な青春時代を家族で、海外で過ごせたこと、またいろいろな経験をしたことを非常に感謝しております。また、皆さまに申し上げたいのですが、海外で生活をするということになりますと、奥さんの役割が非常に大きいですね。子供達がよくここまで成長してくれたなあと、陰でいろいろ苦労をし、また支えてくれた家内に深く感謝しております。簡単ですが挨拶に代えさせていただきます。

司会　ありがとうございます。家内に感謝というのは母親たちが皆望んでいる言葉だと思いますけれども、今、いろいろな例をうかがい、それぞれお子さんによって違いますが、まあ済んでしまえば楽しかったけれども、ほんとは大変だったってことになると思います。松本さん、高校生で初めて渡米したお子さん達の様子を無理かと思いますが、まあ3分間位で概略を言っていたらと思います。

松本　はい、ロサンゼルスから寄せていただきました松本と申します。今のご質問ですけれども、アメリカの場合は、高校生といいますとだいたい4年制のハイスクールですので、9、10、11、12年生ということで、日本の高校、中学3年生も含めて、その時期に初めて渡米した子供たちについてお話しさせていただきます。

対比のために申し上げますが、私は、海外の自分の経験を通じまして、海外に連れていく子供の最悪のケースというのは、小学校5年生の男の子だと思っています。小学校5年生の場合がどうして大変かというのと、第一言語である日本語がまだ完成していないため英和辞典で英語を引いても、国語辞典で日本語を引いてもどっちもわからないということになりかねないからです。高校生の場合は一応日本語ができていますから、英語の習得というのは外国語になります。その辺が一つの大きな鍵だと思います。それから、もう一つは、小学校4年生から5年生で、第一言語の勉強も高度になってきているように、現地校もある意味で

はかなり難しいことをやっているわけです。たとえば、今、アメリカの子供が日本に来て、いきなり皆さんの行かれた小学校の5年生にポンと放り込まれた場合、大変なことだと思います。皆さん、実は子供を海外に連れていくことは、それくらい大変なことを現実問題として子供に強いているということ、是非ともわかっていただきたい。だから、小学校5年生の子に比べて、高校生の子はある意味では、私はまだやりやすいと思います。つまり日本語の基礎ができているということです。それから、その日本語の基礎をベースにしてやらなければならないし、また、やれるということですね。それが非常に大きな違いになると思います。

今も皆さんの中から英語の話しができましたが、アメリカの高校に入って、いきなり生活言語である英語で会話するわけです。それと、たとえば、高1で入ったときに **Social Study** でも、**Physics** でも何でも良いのですけれども、いきなり、それを英語でやらなきゃいけない。アメリカの場合は、だいたい9年生ないしは10年生で生物の時間、**Biology** っていうのを英語でやります。これはアメリカ人の子供にとっても大変な教科です。それを英語でいきなりやらされるということは、先程言いました生活言語の英語どころか大変なことなのです。これは現実問題として、学習言語としての英語をとにかく身につけていないと、勉強の内容を理解し、アカデミックな意味でついていくということは、まず不可能だと思います。日本の高校で初めて英語をということだったらそれはもう、限りなく不可能に近いです。それから、もう一つ付け加えるのは、実は先程から何人かの方から出ましたけれども、やっぱり年令です。日本にいても、一番精神的に多感な時期、前期青春期に当たる時期に来るわけですので、いろんな意味で精神的な葛藤があります。子供たちは、日本の子供でも実はアメリカでも、世界中どこでも一緒だと思うんですけれども、そういうのを、素直に親と話しが出来るかという、それは出来ないです。そうすると、そういうものをシェアする、一緒に分かち合える仲間っていうのは友達ということです。しかし、いくらアメリカ人の良い友達が出来たからといって、自分の心の中を英語で打ち明けられるような言葉の力はありません。ですからまた、日本人同士の間で固まってしまうのも、そういう意味じゃ、私にいわせると無理がないことなんです。以上、言葉の問題、その言葉もただ生活言語じゃなくて高校生として、やっぱり学習用として勉強していかなくちゃいけない問題、それから、三つ目は精神的な自分の心の問題、そういう意味で高校生というのは非常に大変だと思います。ただ、ひとつだけちょっと考えていただきたいのは、海外の生活は大変ですが、よくよく考えたらその年代の子供たちっていうのは、ひょっとしたら日本にいてももっと大変じゃないですか。この辺は今から、またこのお話の中でだんだんクリアになってくると思います。

ここでちょっと自己紹介をさせていただきますと、1980年、あつと言う間に20年経ってしまいましたが、ロサンゼルスにあさひ学園という補習校で、今は2200人いて全米で一番大きな補習校ですけども、そこで、6年間ほど教えておりました。同時に、アシスタント・プリンシパル、その当時は主事と呼んでいましたけれども、高校の管理もしていました。その後、ロサンゼルスに塾を作りました。現在は、シグマ・スクールという日英のバイリンガルでやっている学校で、学校運営しながら、子供たちの進学の問題、また授業も教えています。それから私自身も実は娘が3人おりまして、アメリカでずっと育ててまいりましたので、そ

の辺の経験を織り交ぜて、皆さんとのお話に参加させていただきたいと思います。

司会 はい、ありがとうございます。お話にありました生活言語と学習言語、この辺のことは後程もう一度、触れていただきたいと思います。では、今、お友達関係のお話もできましたけれども、まずは、生活面をあとにしまして、学習面について帰国生の皆さんに伺いたいと思います。まず現地校、インター出身のお三方に、いつ頃から授業についていけたかを伺いたいと思います。さっき半年でついていけたという方ありましたが、「ワァー」と思ったんですけれども（笑い）、大体ついていけたという定義は難しいと思いますが、数学はわりに皆さん早いので、数学を抜かして、体育、美術も抜かして、（笑い）それ以外のもので、音楽も抜かして、しっぽでも良いから、とにかく参加していると思えるようになったのはいつ頃か、それからどういう勉強方法をし、何が効果的だったか、その辺を話していただきたいと思います。まず、針間さんからお願いいたします。

針間 勉強に関しては、僕が行った学校は ESL が、ここの地域の中では一番充実している学校で、専門の先生が常時、だいたい4、5人いるオフィスが設けられていて、しっかりとした体制がありました。そのプログラムも、英語だけじゃなくて、アメリカ史とか、あとはアメリカの政治、生物学なども、ESL の生徒だけのためのクラスをちゃんと設けてあり、確かに英語は最初は全然わからなくて、大変でしたけれども、言っていることが100%わからないということはなかったので、不可能なことではないという風に感じました。あとはやっぱり、最初は家庭教師、チューターを頼んで、学校の教科書などを一人でやると時間がかかってしまうので、一緒にやってもらおうとか、その程度です。あとは ESL の先生が「何か学校でわからないことがあったら、すぐにここに来れば」なんて言って、いろいろ対処してもらえたので、僕は、ESL の先生がすごく大事だったのですけれども、そういった学校の中のシステムがあるところを選ぶと良いと思います。

司会 はい、ではお隣、笠原さん、お願いいたします。あっ、ごめんなさい、ちょっと失礼。（笑い）針間さん、具体的な、効果的な勉強方法について何かありますか。

針間 具体的な勉強方法で、最初にやったことは、たとえば歴史の教科書なんかを見ても、1ページにわからない単語が何十個もあって、いちいち、一個図ずつ調べたら時間がない状況だったのですが、もちろん自分で調べないと単語を覚えませんが、チューターに、ここはどういうことを書いてあるんだということをまず説明してもらったことがやっぱり効果的だったと思います。日本の受験勉強みたいに一字一句全部訳していたら、ほんとうに時間がないので、全体の内容をどう捉えるかということのを先にやったほうが、僕は良いと思います。

司会 はい、わかりました、ありがとうございます。じゃ、笠原さん。

笠原 まず、いつ頃から現地校の授業についていけるようになったかということなのですが、私はさきほど学校が変わったと言いましたが、その学校が変わってから、一年位で授業の内容が大体理解できるようになり、宿題もこなせるようになり始めました。でもわかるようになって、ディベートとかプレゼンテーションという授業の方式で自分の言葉で表現するまでは、やはり一年から一年半位かかったんじゃないかと思います。

それと、勉強法ですが、私の通っていた私立の学校は、私たち姉妹しか日本人がいなかった

ので、ESL のクラスはなかったのですが、英語の先生が個人的にサポートをしてくださいました。英語の授業の理解できないところを先生に聞いたり宿題も少し見ていただいたりというのを、週一回位のペースで行っていました。それとは別に、家で英語力をつけるために、渡英してから三年間ずっと家庭教師をつけて英語を習っていました。それと GCSE のコースを二年目に入ってから、Biology と Physics の家庭教師の先生について習って、宿題やコースワークなどでわからない部分を聞いたり、GCSE の過去問を一緒に解いたりという形でサポートをしていただきました。それと、どういう勉強の仕方がいいのかということですが、私の場合は、日本にいる時も授業を理解するだとか、テストの勉強をする時も、問題集や参考書を見て理解して納得をして、勉強をするという方法をとっていたんですが、イギリスには、問題集や参考書といった類はほとんど無かったので、Biology や Physics など専門用語がいっぱいあるものは、やはり教科書が難しいので、日本の参考書や問題集のそれに対応する部分を読んで理解をするという形がいいと思います。以上です。

司会 はい、日本の参考書とか日本の教科書もお持ちになりましたか、やっぱり。

笠原 日本の参考書と一緒に教科書も、すべてが一緒というわけではないですが、それに通じている箇所というのは、たとえば、Biology で、単語がすべて難しいので普通の英和でも載っていないとしても、それを参考書で見たら訳が載っていたりするので、やはり参考書と問題集、そして日本で勉強していた教科書を持っていくと役に立つと思います。

司会 はい、ありがとうございます。一日の大体の時程ですね、何時に起きて、何時に寝てという平均的な一日を取り上げて、ちょっと紹介していただけますか。どれ位勉強したか……。

笠原 家でどの位ということですか。

司会 はい、そうです。

笠原 そうですね、あの、何時間とかそういうことはよくわからないんですが、GCSE の時は、結構、科目を多く取らなくてはいけなくて、それぞれの科目にすごく宿題がたくさん出たので、毎日、授業が終わってからすぐに家に帰って、授業の内容を理解しないと宿題とかもできないので、それをまず、家庭教師のとか、学校で先生の指導を受けたりしました。宿題を全部終わらそうとすると、丸一日かかってしまうのですが、そういう毎日の生活を、一年位続けていたら、やっと、宿題とか、その授業にもついていけるようになりましたし、英語も大体理解できるようになったと思います。

司会 ありがとうございます。では、小林さん、お願いします。

小林 そうですね、針間さんと、大体同じだと思うんですけども、ESL の体系が、しっかりしてまして、最初、主に英語の基礎を教えてくれて、他の ESL の授業は、最初は数学とか英語位しか取らせてもらえないんですよ。数学とか英語を重点的に ESL で教えてもらって、最初に取る難しい授業っていうのが、松本先生がおっしゃられたように、Biology、生物の授業でした。それは特別に ESL の先生に呼ばれ、その授業に入る前に教科書を渡され、わからない単語を少しあげて、この意味を明日までに調べてきなさいと言われて、単語から入って徐々に単語を理解して、徐々に全体像を理解するというふうな形式でやっていきましたね。

家庭教師もつけましたが、特別にこの授業、あの授業に家庭教師をつけたという訳ではなく

て、英語を勉強するために家庭教師に来てもらって、語学力、英語の力をつけるための勉強をし、時々分からないことがある時、授業のことを聞くこともありました。笠原さんがおっしゃっていた様に、やっぱり日本の高校の教科書、参考書などはすごく役に立ちましたね。具体的に細かい所とか、分からない所も、日本の教科書や参考書を見てみると、なるほどここはこういうことが言いたいのかというのが理解できるようになって、そこがある一部分わかると、次の書いてあることがわかるという具合でした。日本の教科書、参考書などは大変役に立つと僕は思っています。それ位です。

毎日の勉強時間ですけれど、これは宿題の量とかもありまして、多いときはそれこそ徹夜でやらなきゃ終わらない様な時もあります。これはもう、高校に行ったら高校卒業するまで変わらなかったですね。宿題の量も、最初はやはりできないので、英語もわからないし、何を書いてあるかもわからないので時間がかかり、普通の人には30分で終わるのを自分は3時間かかるという感じだったと思います。

司会 ありがとうございます。資料の19、20ページに先程のGCSEの概要が書いてございますのでご覧ください。松本さん、今学生さんたちがいろいろ話してくださいましたけれど、先程生活言語と学習言語という話ができましたが、親としましては外でペラペラと英語を喋ってないと、つまり生活言語ができてないと結局英語はできてないんじゃないかとイライラしたり、日本人の多い場合は「日本人と遊ぶな」とか「付き合うな」とかついつい言うってしまうのです。子供の時から海外で過ごしているのではない場合、生活言語はおぼつかなくても学習言語はついていっているものなのか教えていただきたいのですが。それから英語が理解できないうちは、知的空白期間ができてしまいますね。空白期間をどうしたら良いのか、頭の中はどうなっているのか、その辺のこともお話をしていただけますか。

松本 なかなか大変なのですけれど、先ず言葉の問題で、質問の向きを逆にします。今三人の方に答えていただいて皆さんどう思われますか。たとえば笠原さんですか、一番典型的に、毎日ほとんど学校から帰ってきてずっと勉強し、週末も勉強している。これだけ勉強してくれると海外に来て絶対やっていけますよね。ただ、これから海外に行くお子さんにその話をしたら絶対に行くのは嫌だと言います。(笑い)それから、お父さんお母さんにしてもそんなにやらせる自信があるのかどうか。それから、私は自分がその立場ではなかったのでわからないのですが、家庭教師を二人も三人も雇って、お父さんお母さんが夜、財布を見て心配しなくてはいけないということになるのではないかな。そんな努力して、だからこの三人の方はここに座っているのだと思いますが、それぐらいの努力をしてくれれば海外でやっていくのには問題はないでしょう。今お気づきになったかもしれませんが、三人にそれぞれ一番苦労したのはどこですかと聞いた時に、先ずでてきたのが高校生の段階で、先程私が指摘させていただきましたように、ある意味では学習言語、勉強の中身が大変なのですよね。だから極端な話、これが小学校の低学年であれば会話ができるかどうかの問題です。最初に私が申し上げた、第一言語はできているし、高校生ですからだいたい相手の人がどういう事を言っているのか想像もつくし、まさかニコニコ笑ってガンガン怒っていると思うこともないだろうし、そういうことの想像ぐらいはつくわけです。そういう意味では社会経験を積んでいま



すので、生活言語で生活していくのにどの位かかったかという、数ヶ月から半年位でソコソコ友達ともくっついて歩けるようにはなっている。ただ勉強のほうで、2、3年間、卒業までずっとこれだけの時間をかけてやられた方たちは相当中身のある、学習した内容も入っているのではないかと思います。

私が見ている限りアメリカに関して、子供たちが、先程ちょっと言いましたが、空白の期間というのがございましたけれど、たとえば **Biology** といっても言っていることはその場その場でわかって本当に理解できるわけではなく、英語で良く分かったとしてもそれでは日本語で説明してごらん、単語は英語を使ってもいいよ、と言っても説明できない子がたくさんいます。中身の理解、俗にいう抽象的な思考までできているのかどうか、高校生で海外に行った時に気をつけていないと空白、別な言い方をしますと抽象的な思考ができてないことがあります。16、17、18歳でそういうものがもしスポンと抜けていたら・・・。ロサンゼルス空を見上げて「良い空だなあー」という、性格だけだったらすごく良いーそれだけで日本中どこの大学だっては入れるー(笑い)、学力を聞かれなければ。日本語でなくても、英語でそれができているのでしたらいいのですけれども。そういう意味で学力の空白、それが日本語で何を経験しましたか、何を学習しましたかと聞いてもよくわからない。一つの例で言いますと、カルフォルニアでは12年生、最終年度で **Government** や **Economics** というのをやり、6月に卒業します。だいたい帰国子女の入試というのは9月以降ですので、夏の間は皆勉強します。今子供たちは政治とか経済の志望が多いので、そういう時私は親切で、経済学部に行くのだったらつい半年前までやっていたのだからと、アメリカの教科書の標準的にのっている内容を聞いてやると、何も覚えてないし理解していない。現地校でどんな成績をとったかと聞くと **B** をとっていて、だから卒業できたと答える。言いようによっては、それがすごく心配になる部分じゃないかと。目先の勉強ですから宿題を出されてやるけれど、本当に思考するという頭の中のトレーニングが高校生としてできているのかと、それが非常に心配です。それが今、司会の方がおっしゃった空白の期間ととれるのではないのでしょうか。

司会 はい、ありがとうございます。それで、どうしたらいいのでしょうか。

松本 そういう意味ではさっきの三人の方ぐらいは勉強していただくことでしょね。家庭教師をつけて全部教科書も説明してもらって、単語も必死に覚えて毎日徹夜してとは言わないですけど。この中にはもちろん日本の学校に行っていた方もいらっしゃいますので、その子供たちにとっては日本の学校にいた時よりももっと現地校の勉強が大変だったということなのです。はっきりいうと日本の高校生でしっかり勉強している子で、向こうに行ったらなにも勉強しないで楽に高校卒業して帰国子女で日本の大学に入れると思ったら、やっぱりそれは通用しないですよ。そこは絶対に勘違いしないでいただきたい。やり方は家庭教師とか、**ESL**の充実している学校であればそこでサポートしてもらうこともできます。今の全米の状況でいうと **ESL**は殆ど期待できません。そうするとその分は自分でやるか家庭教師でやるか、よくできるお父さんだとお父さんと格闘するか、毎日3、4時間何らかの形で頑張ってくれば **survive** できますよ。それが答えと言ったら答えです。

司会 ありがとうございます。一応、補習校は9ページに載せておきましたけれど、補習校の

高等部はあまり多くありません。それから、日本で準備しておく事という、やはり日本での義務教育での基礎学力はきちんとつけておくということが大事な訳ですよ。

松本 はい。私はアメリカですので、英語と日本語の違いはあると思うのですが、だいたい科目は日本とアメリカはほぼ同じ位ですね。2002年から日本がガクッと減るのですが、今のところアメリカと日本はほとんど内容的に同じだし、それから教育の仕方もよく似たところがあります。まさにアメリカに来た子で、今おっしゃったように基礎学力ですが、現地校の先生方もESLの先生に聞いてもわかりますけれど、日本語でしっかり勉強してきた子は英語でもちゃんといっていますよ。日本語での学力という意味では、たとえばお父さん方で「うちの子は一年もかけて英会話をやりました」と言う方がいますが、私に言わせれば高校生でお連れになるのだったら英会話よりも英文法の勉強を日本語でしっかりしてきてください。現地校の三年生のテキストで実は日本の高校ででてくるような仮定法というのが全部でできます。単語は教科によって違うので辞書を引いてもらうのですが、文法がわかってないと絶対に内容は理解できません。もし海外に行く時に何の準備をしたらいいのですかということだと、日本の勉強をしっかり習慣づけ、それから特に高校生にとっては学校で習った中学校3年、高校ぐらいの英文法をしっかり勉強してきてほしい。そして、現地校でソコソコの努力をしてくれれば、それは現地校でsurviveしていけますよ。

司会 学生さんたち、何か言い残したことはないですか、勉強に関して。（針間手を挙げる）はい、針間さん。

針間 僕は、最初行く時にすごく不安だったのは、日本の高校に半年間行きましたが、そこでやっていることを英語で換えてやったら絶対できないと思っていたのです。でもそれは間違いで、学校のシステムが全然アメリカでは違うので、僕が思うに、アメリカの授業は日本の学校に比べて精神的プレッシャーが少ないのです。日本だとなんでもかんでも偏差値だとか順位だとかクラスのビリの方にいると嫌な気分になるとか、そういうのがあると思うのですが、アメリカはもっと自由で、別にこの科目を私は得意ではなくても他で得意だからこれはいいと、そんなふうにごくフレキシブルだったのです。ですから英語は難しかったのですが、授業に対しては日本の学校に比べてアメリカの方が良いなと思いました。

司会 はい。他に。（小林手を挙げる）小林さん言い残したこととか言いたいこととか、勉強に関して。

小林 そうですね、高校の授業を通して一番感じたのは、やっぱり足し算でも1+1がわからなくてその次がわからないように、基礎の基礎をとりあえずやっておいたら次に進めるというのを一番感じました。だからわからなかったら原点に戻って、高校の教科書がわからなかったら中学の教科書を読んでみて、それがわからなかったら小学校の教科書を読んでみてという、そういう掘り下げた勉強をやって徐々に理解できていくのを感じました。

司会 ありがとうございます。では、今度は話題を変えて生活について入っていきたくないのですけれどいいでしょうか。藤澤さん、お願いしたいのですが、藤澤さんの場合は、お父様の仕事関係の寮に入っていらっしゃったのですよね。

藤澤 はい

司会 その寮は大学生が多かったということですね。

藤澤 はい。その寮は、地方に住んでいる父の会社の社員の息子とか娘さんが東京の大学に通う時に東京で生活するためにある寮なのですけれど、特例として私は高校 1 年から入れてもらいました。

司会 身の回りの事や父母会とかお金の事などいろいろあると思うのですが、その辺のところはどのようにして暮らしてらしたのでしょうか。

藤澤 父母会に関しては神奈川に叔母が住んでいましたので、代わりに出てもらったのですけれど、あまりその辺のところは覚えていません。日本で一人残って寮で生活するというのに関して、先程申し上げたのですけれども、物質的な面では寮ということで一人暮らしではなく、食事もきちんと出ましたし、お風呂も全部完備していましたし、不自由ということはないのです。経済的な面でいうと、親が私の日本の銀行口座にお金を振り込んでくれるのですけれど、日本で「お小遣いだよ」と言ってくれるようなお金と違って、銀行で口座を見れば通帳にお金が入っていて、通帳上だったのであまりお金の有り難みを感じるということがなかったですね。逆に、これが親の顔が見えないってことで通帳にお金が入っているからどんどん使えるんだという感じで結構無頓着になってしまうということもありました。ですが高校生だったのでアルバイトとか近所のコンビニエンスストアでやりまして、一時間こんなに頑張ったのに 650 円か（笑い）ということでお金の有り難みを肌で感じたこともあります。もし日本で一人暮らしさせるのでしたら、アルバイトなどさせるのが一番いいと思います。やはり、自分で働けばお金の使い方とか金銭感覚が身につくと思うので、口で言うよりも実際に働かせるといいのではないのでしょうか。高校によってはアルバイト禁止というところも多いと思うのですが、実際やっていることが多いと思うのでそれが一番金銭的な面ではいいと思います。

あと精神的な面でいうと、親が遠くにいるということで親とのコンタクトというのが、親と一緒に住んでいる時以上に大切だと思います。私の場合、電話と手紙が主でした。電話は週一回ぐらいかけたりかかってきたりとか、手紙は小包と一緒に一ヶ月に一回とか三ヶ月に一回とかそういう形で来て、やっぱり子供の側としては照れくさくて毎週毎週電話がかかってくるので「そんないいよー」という感じですが、やっぱりそれだけでとても精神的支えになったという気がします。支えると子供っていうのは全然違うと思います。そういうコンタクトの面では昔と違って今はEメールとかありますね。パソコンが普及しているのでコンタクトが取りやすいし、逆に親は遠くにいなくて隣の部屋にいるんじゃないかとそういう感覚になってしまうと思うので、それはやはり利用した方が良いのではないかと思います。これぐらいですけれども。

司会 ありがとうございます。寮のある学校は資料の 17、18 ページにあります。寮のある学校、ない学校、民間の寮もありますし、いずれにしても結構お金のかかる問題ですが。

藤澤さん、さっき軌道修正するのにやはり親がいたら、というお話がありましたが、たとえば大学生が周りにいましたら「いいじゃないか、飲めよ、飲めよ」「そんなに勉強しなくてもいいじゃないか。大人になったら関係ないよ」とか（笑い）周りが言ったと思うのですけ

れど、その辺はどうでしたか。

藤澤　そうですね。残念ながらと言うかそういう人はいなくて（笑い）結構皆真面目な方で、逆に勉強面の相談に乗ってくれたり、もちろん飲みとかあって、一緒に遊びに行ったことはありましたけれど、年齢が3歳位しか離れていなかったということもあり、そんなにひどいことはなかったです。逆にそういう人がいたことが良かったと思っています。お兄さんの存在で相談に乗ってくれたりしましたし、ルームメイトというかたちで2人1部屋の時もありましたが、実際大学生の生活と高校生の生活とでは、ずれていて時間的に夜遅く帰ったり徹夜とかしたりで、私は8時に出かけて5時に帰ってくるという生活で食い違いはあったのですけれども、でもそれは慣れだと思います。共同生活に慣れることができ、そんなに悪い影響はなく、むしろ良い影響のほうが多かったと思います。

司会　ありがとうございます。高畑さんは寮でしたよね。やはりプライバシーの問題とか友人関係、勉強、食生活とかいろいろあったと思うのですが寮の生活について話していただけますか。

高畑　私の通っていた高校は全寮制だったので生徒全員が寮に住んでいて、アジアに両親が住んでいる人もいれば、先に両親が本帰国になって子供だけ寮に残るといった人も何人かいました。

寮の中で困ったことは、先程話させていただいたように、週に2回しか日本食がでないので大変胃に負担がかかったというのがありました。（笑い）風邪とか病気にかかった時は surgery と言いまして日本の保健室のような所がありまして、一応面倒は見ていただくのですけれども、もし大きな病気にかかった時は近くのイギリスの病院などに連れて行っていただきました。それからお金の管理ですけれども、これは全て先生方が管理し、生徒は小切手を持って生活しました。生活必需品は週に一回スクールショップというのがございまして、そこで歯ブラシ、お菓子ですとか文房具とか全てそこで買えるようになっていました。

通っていた学校での特別な行事はオープンデーというのがございまして、日本でいう文化祭のようなものですが、生徒全員が一週間ぐらい準備期間を設けまして、その間一切授業がなく、ずっとオープンデーの準備をするという感じで、オープンデー当日は地元の方々やロンドンに住んでいる日本人の方々が来ていただきました。

寮で24時間当然友達と一緒にいる訳で、相手の嫌なところも良いところも全部見なくてはいけないという辛さはあったのですが、それがあったからこそすごくいい友だちができて、相手を思いやるという気持ちを覚えたような気がします。落ち込んだ時とか辛い時というのは友達にももちろん相談できますし、それから先程申しました surgery という場所で校長先生の奥様が看護の資格を持っていらっしゃるの、そこでその方に話を聞いていただいたり、先生が24時間学校にいますので相談をしたりしました。

司会　ありがとうございます。インターと現地校のお三方に簡単に生活に慣れるまでどうだったか、どのように友達を作ったか、クラブ、ボランティアなどはどういうことをやってきたか、その辺のところをお願いします。小林さんから。

小林　マレーシアとインドネシアのインターナショナルスクールに通ったのですが、マレーシアとインドネシアは日本人が多く、その分やはり友達は日本人が多かったですけれども、先程

言いましたようにクラブ活動、スポーツなどをやっていたので、そういう活動を通していろいろな国の友達とも仲良くなっていきましたね。普段の生活は学校に行き、終わったら家に帰って勉強してということの繰り返しですけど、週末には友達とどこかに行くとか好き放題やっていました。危険なことも特になかったし、やはり日本とは違いますから、それぞれ住んでいる都市の治安もあると思うのですけれども、まあよほどのことがない限りマレーシアとインドネシアに限っては大丈夫でしたね。

司会 好き放題は後で伺うことにして（笑い）、笠原さんは生活に慣れるまで結構ストレスはありましたか。

笠原 はい、私の場合すごくストレスがあったのですが、7月にイギリスに来て、9月に学校へ行くまでの間に、日本の中学でのすごく親しい友達が、今日本で流行っている曲だとかドラマをビデオテープにとって送ってくれて、励ましの手紙とか、すごく頻繁に送ってくれましたので助かりました。私もイギリスに行った時には頑張ろうと思っていたのですが、やはり日本に帰りたいなという気持ちがすごく強くて、ホームシックになることもよくありました。

また学校が始まって日本人の多い学校から新しい学校に自分で変わりたいと言ったのは良かったのですが、やはり最初の頃は外国人が話しかけてくれてもそれに答えるだけで精一杯で、自分から話題を提供するという事は出来なかったもので、言葉のキャッチボールというのがなかなかスムーズにいきませんでした。たぶん小学生から行くと遊びをすることから仲間を作れると思うのですが、私は中学でしたから、日本でもそうだと思うのですが、やはり中学生になると遊びというよりも会話を楽しむということから友達関係というのが深くなっていくと思います。それがイギリスでも一緒に、会話を楽しむことができなければ友達を作れないという環境だったのですごく苦労しました。そしてまたイギリス人は他人に干渉したり、細やかな気配りがあまりなかったので、こっちが積極的に話しかけていかなければならなかったもので、友達ができるまでには新しい学校に転校してから6ヶ月位はかかったと思います。

友達ができただけですが、私の行っていた学校は純粋なイギリス人以外にも他の海外に住んでいた人と国籍はイギリスですけど両親の出身が違う国籍の人が多かったので、お互いの文化や生活習慣に興味を持ったりし、私が授業で困っていたり、学校の中でわからなかったりということを親切に教えてくれたことで友達になれたと思います。友達ができるまではクラスの中で疎外感を感じたり、私は話好きなほうなのですが、そういう本当の自分を出せないもどかしさがよくありまして、そういうところからストレスを感じることもありました。友達ができからはクラスや学校の中に自分の居場所を見つけることができ、ちょっと気持ちが楽になった気がしました。

司会 はい、ありがとうございました。針間さんは学校の生活に慣れるためにどういうことをなさいましたか、すぐ慣れたかあるいは慣れなかったのかどうか、その辺のところを。

針間 そうですね、学校にいる時間が一番長いので、友達を作るということは先ず最初だと思います。けれど、最初は英語ができないのでとりあえずクラスで、たとえば僕にとっては体育とか言葉をあまり使わないで身体を動かしたりして、一緒にグループになった人と積極的に話しをしました。たとえば僕はテニスやゴルフをするのですけれど、「あなたはゴルフする

んだ」ということで「では今度一緒にやろう」とまあそんなふうに、趣味とかスポーツなんかで一緒に交流するということが大きかったのじゃないかと思います。あとはそうですね、僕の場合 ESL に長くいたのですけれど、そこにいるとお互い外国人なので英語がわからなくて辛い思いをしていることは何も言わなくてもわかるので、意外とその辺でわかりあえたりしました。僕が一番仲の良かったのは韓国の人や、同じアジアの友達が多かったのですけれど、そういう人たちの中で先にアメリカに来ていた人に英語をサポートしてもらったことなどが結構大きかったかなと思います。

司会 ありがとうございます。林田さん、親御さんの目からご覧になって、インターの生活は日本とこういうところが違うとかこういう生活をしてきたとか紹介していただけますでしょうか。

林田 家の娘たちは家庭から通っていましたから、そういう意味では精神的に非常に恵まれていたのではないかと思います。確かに学期中はインターの場合、勉強が大変で、宿題の量も多いですから毎晩遅くまで勉強していましたし、よく頑張るなというぐらい頑張っていました。特に最初の頃は学習言語に慣れるまで相当時間がかかり、教科書で何を言っているのかわからなかったと思います。そういうことで時間がかかったことが多々あったと思うのですけれども、よく頑張ってくれたと思っています。子供はそういう環境に入ると意外と強いものだなあという印象を持ったことを今でも覚えております。それとインターの場合、世界各国からいろんな子供たちが来ていますし、言葉も違うので、科目ごとに先生がその子が理解している度合いに応じて指導をしてくださいます。そういうわけで子供たちが何かわからないところがあればその先生のところへ行けば教えてもらえるということで、その辺のところはインターの良いところだなあと思って感心して娘たちの話を聞いていました。

それと親に対して各科目毎に子供たちの成績について説明の場が設けられています。「お宅のお子さんはこの程度の成績ですよ。こういうところをもっと勉強しないとだめですよ」ということで、問題があれば親に対して教育相談にも乗ってくれます。学校がしっかりしているものですから、親は子供の教育のことであまり心配しなくても家庭で親が勉強できる環境さえ整えてやればなんとかやっつけていける、そのうち立派な高校生に成長していくと信じていることができ、そういう点で本当に素晴らしい学校だったと思います。

また、学校自体の雰囲気として、子供たちが多方面の勉強ができる環境が整っているのではないかという気がします。それは一つには勉強以外に学校にいろいろな行事があり、子供が楽しみにしているような文化祭とかスポーツ大会それから国際交流の場であるインターナショナルフェストとかサークル活動とか盛んです。子供たちは勉強もしますが、こういう楽しみもあるから勉強もするんだという励みにもなるのではないかという気もするのですが、そういう意味で非常に恵まれた環境にあるのではないかと思っています。

司会 あと、休憩まで 5 分なので、その前に学生さんたちに伺いたいのですけれども、簡単に言えるものではないのですが、自分の性格は海外生活に向いているなと思う方、ちょっと手を挙げてくださいますか。

(針間、小林手を挙げる。)

はい、簡単にどこがどう向いているのか、先ず針間さんから言っていただけますか。

針間 僕は日本の学校にいる時から、日本の先生方には申し訳ないのですが、委員会などの押し付けがましい仕事は大嫌いで、押し付けられてやる事がもともと好きではなかったのです。その点アメリカだと自分がやりたいことだけやるという、たとえば自分がクラブをやりたいとしたら、そこに行ってやりたいと言えば入れてくれるということです。日本の学校だと部活はほとんどの生徒がやっていると思うのですが、他の人もやっているから僕もなんて感じで入って自分に合っていないこともあり、合わなくても周りの目が厳しくて精神的なプレッシャーがあったと思うのですが、そういうことが全くアメリカではなくて、伸びのびして僕にはとても合っていると思いました。

司会 ありがとうございます。あと、積極的に手を挙げてくださいました小林さんお願いします。

小林 性格的にあまり最初に深く考えるほうではなく（笑い）取り敢えずやってみようかというのが先にたつんですよ。ですから父がマレーシアに転勤した、では行ってみよう、行ってから苦しむみたい（笑い）、苦しんでいても何とかなるでしょうみたい（笑い）にいつもやっていたので、そういう点で違った環境に身を置いた時に、深く考えて自分を追いつめてしまうようなことがなく、何とかありますよと気楽にしていたのが今考えると良かったかなと思います。

司会 ありがとうございます。笠原さん、ちょっと迷っていらしたけれど。

笠原 向いているとかそういう訳ではなくて、イギリスの生活も日本の学校生活というのも私にとって両方とも良い面がありました。イギリスの場合は「個」というのを大切にするので友達と尊重し合って生きていくというのが私にとってはすごくいいなと思ったところなのです。逆に日本の小学校、中学校では、体育祭や文化祭といった行事がすごく盛んだったこともあって、皆で協調して一つのものを作りあげていくことで達成感とか満足感が得られました。そういうことが私はすごく好きなのですが、イギリスにいた時は体育祭とか文化祭とかそういう行事はなかったですし、クラブ活動とか委員会とかそういうので友達と協調しあって何かをすることから友情が生まれるってことがなかったもので、そういう面では日本の生活の方が向いているかなと思いました。

司会 両方の良い面を言ってくださって助かりました。藤澤さんと高畑さんは手をお挙げにならなかったのですが、藤澤さんはどうですか、ご自分の性格から見て。

藤澤 そうですね、私は小林さんや針間さんからみるとちょっとおとなしいほうなので（笑い）アメリカに限って言えば、自分から手を挙げて何でも主張していかなければならないところで、日本みたいに気を遣ってくれて「どうしたんだ」と言ってもらえないで黙っていれば最後までいってしまうということがあります。自分から何でもやってやろうというような活発な子ならいいのですが、私はどちらかと言うと最初は人見知り（？）で引っ込み思案になってしまうほうなので、そういう意味でいきなり海外に行ってやっていくというのは、時間的な意味では苦勞がありました。なかなか活発な方に比べると慣れるのに時間がかかるということはありません。

司会 ありがとうございます。高畑さんは如何ですか。

高畑 私の場合は幼い頃ベルギーにいたのでフランス語をしゃべれるようになるまであまり時間はかからなかったのですが、現地の人たちとすぐに仲良くなることができました。でも一回、中学校で日本に帰ってから日本語で生活することがあまりに楽に感じてしまって、高校でも日本人だけの高校に通ったので、今考えると外国人との性格の違いがあると思うので、私も藤澤さんと似ていて、たぶん自分からどんどん日本語以外の言葉で自分を主張するということが難しいことに思えました。

司会 ありがとうございます。

参加申し込み用紙にご質問を書いていたいただきましたが、帰国後のお尋ねが多くございました。本日はそれにお答えする時間がございませんので、大学、高校の入学、編入学については受付に係りがおりますので、そこでお尋ねください。また資料、フレンズ便りの編入情報もご覧いただき、ご質問がございましたらどうぞ受付にお越しく下さいませ。

これで前半を終わりにしたいと思います。恐れ入りますが、質問用紙に係りの者にお渡しください。

<休憩>

(会場に配布された質問用紙を休憩中に回収)

司会 後半は、先ほど会場から頂戴いたしました質問やご意見、それから、先日シンポジウムの申込用紙にお書きいただきましたご質問に沿いまして進めたいと思います。まことに申しわけございませんけれども、時間の関係ですべてのご質問にお答えすることができませんが、いただきましたご質問は、今後フレンズの活動に役立たせていただきたいと考えておりますのでご了承ください。個人の方と全員の方への質問がございますが、最初に個人の方宛の質問から始めさせていただきます。最初にまず高畑恵さん宛のご質問です。よろしいでしょうか。一つ目が、先ほどちょっと性格的なことも触れられたと思いますけれども、「高校を現地校でも国際校でもない、在外私立校を選ばれましたが、どういう点が良くて、どういう点は失敗だったと思われませんか」。

高畑 高校から海外に行かれる方の場合ですと、やはりこの年からまた英語を一から勉強し直すということは大変なこととして、私の場合もそれがあったのですけれども、その点は在外私立で良かったと思っています。日常生活を日本語で過ごせるということと現地の方々との交流もあったということと、あとやはり私が一番大きかったと思うのは友だち関係でした。友だちは24時間一緒にいて、お互いの悩みを聞きあったり、話す機会も多くて…寮の部屋というのは2人部屋もあれば10人部屋もあるんですけれども、夜一緒に話したりとか、そういうことができて、大変良い友だちができたことです。在外私立ですと、やはり現地校よりは英語を話す機会が少なく、たぶん現地校にいたほうが英語を話せる…日常生活においても



そうですし、勉強に関してもそうですけれども、実際生かした英語を話せるようになるという点では、現地校の方が良いと思います。

司会 ちょっと失敗だったなと思われたところは、その点ぐらいでしょうか。

高畑 はい、そうです。

司会 ありがとうございます。もうひとつ、高畑さん宛なんですけれども、「町へ出て遊ぶことはなかったのですか。また、週末はどのようにしてお過ごしでしたか」というご質問です。

高畑 1月に1回か2回ほど、Outingと申しまして、パッとみんなで外へ出て買い物をしたり…ショッピングというのもありまして、地元の町で買い物をしたり、ロンドンまで行って買い物をしたり、という行事もありました。あとは1年間に1回、ウィンブルドンへみんなで観戦に行くという行事もありました。それから、週末ですけれども、土曜日は午前中授業をして、午後はプライベートレッスンがありまして、それは個人個人で自由に選べるのですけれども、ピアノとかギターや声楽といった音楽のレッスンを外国人の先生から教わったり…。楽器だけではなくて言語のプライベートレッスンというのもありまして、英語とかスペイン語、フランス語、イタリア語、いろいろな言語のプライベートレッスンを、日曜の午後とか土曜日の午後を取っている人もいました。毎日礼拝があるのですけれども、日曜日の午前は、地元の教会に行って日曜礼拝を受けたりすることもありました。

司会 地域の方とか現地の英国人の方との交流はあったのでしょうか。

高畑 そうですね。ESLという授業の先生方というのは、たいてい現地の方々に、その先生方とお話しする機会がありました。あと、教会へ行った時も地元の人たちと話す機会はあったんですけれども、それ以外は、それほどそういう機会は設けられていませんでした。

司会 ありがとうございます。次に、「帰国子女枠で大学入学された方」というご指定がありますので、針間さんとそれから小林さんに伺いますけれども。「帰国子女枠で試験を受けた時の勉強方法、また大学入学後スムーズに勉強についていけたかどうかについて」という質問です。針間さんからよろしいでしょうか。

針間 大学受験ということなのですが、僕の場合は3年間というちょっと短めの滞在だったので、最後の1年位に慌てて準備しだしたという感じですがけれども…。向こうでいう日本のセンター試験みたいなのがあって、それはSATというものですが、それを取ることと、あとはTOEFLという英語のテストがあって、それも取りました。あと、SAT IIという、科目別の英語とか理科とか社会とかそういうのもあるのですが、それも取らなければいけないということです。具体的に勉強法としては…ほんとに僕は土壇場にならないと始めない性格なので、帰国する半年ぐらい前に、SATの勉強法を教えてくれる、そういうアメリカ人向けの塾みたいなのがあって、そこでいろいろ試験のテクニックとかを教えてくれまして、集中的にやりました。ですから、帰国する半年前ぐらいが一番忙しくて、それこそ週7日学校に行っていたということが3ヶ月位あって…。そのうちの土曜日が補習校で、小論文の勉強をさせてくれたのでそのクラスに行って…それは友だちに会いに行くという意味もあったんですけど、そこに行って小論文の勉強をしました。あと、日曜日にそのSATの塾に行ったり、TOEFLの勉強としては、カウンティーがやっているナイトスクールとかがあるので、そうい

った授業を受けたりしました。

司会 ありがとうございます。小林さん。

小林 インターナショナルスクールですけれども、生徒はアメリカの生徒だったので、だいたい針間さんと同じような感じでやっていました。それでもやはり SAT と SAT II は、卒業する1年ぐらい前から徐々に勉強し始めて点数を取っていく、という感じだったんですけど、TOEFL のほうは、入学した頃から始めまして…。TOEFL だと日本でも参考書とか売っているので、そういうのをやってみたり、あと、友だちというか先輩とかに TOEFL のコツなども聞いたりして、教えてもらったりして、勉強していました。SAT と SAT II は特に勉強したという記憶はないですけれども…TOEFL より受ける回数は少なかったんで、一発勝負の感があって、それなりには勉強したのですけれども、TOEFL より難しいので…。勉強は TOEFL を中心に TOEFL をとにかくちゃんと取ろうということでやりました。

司会 SAT の場合は、針間さんのように塾に通うなどそういうことはなさいませんでしたか。

小林 特別に SAT で塾に行ったということはないですけれども、友だちがたまたま SAT の英語版の、アメリカで市販されているものだと思うのですけれども、過去問のようなものを持っていたので、一緒に勉強したりしました。

司会 ありがとうございます。もうひとつ帰国子女入試についてのご質問ですけれども、「現在の帰国子女入試は帰国子女の力量をはかることができる試験だと思いますか」というご質問です。力量というのは非常に定義が難しいと思いますけれども、いかがお思いでしょうか。小林さんからお願いします。

小林 自分が受けた時と現在がどうなっているのか、よくわからないんですけれども…。取りあえず自分が受けた時は、TOEFL とか SAT のテストの点数と小論文—事前に学校になぜ入りたいかという小論文—みたいなものを出して、それが評価されたわけですけれども。要するに点数だけじゃなくて、「自分がなぜ入りたいか」とかを聞いてくれる面があったので、その点では自分の力量というか、自分が何をやりたいのかを聞いてくれていたところが、少しはよかったなと。全く点数だけでバツサリ、というよりは、少しは言いたいことを言っておけたのが良かったんじゃないかなと思います。

司会 針間さんはどう思われますか。

針間 日本の受験と比べて、いろんなことをやってきたことが評価されるというか、勉強だけじゃなくていろんなことが評価されるので、帰国子女入試自体は、僕は良いと思います。例えば僕は英語に関しては6～7年いた人と比べてあんまり得意ではないので、ESL の中で何か賞をいただいたりとか、あとスポーツをやったりとか、いろいろなことを総合的に見てくれたので、その点では良かったなと思います。

司会 ありがとうございます。針間さん、小林さんにはまだほかの質問もございますけれども、ちょっと笠原さんにご質問いたします。「笠原さんは高2で帰国、そして編入されていますけれども、イギリスにいらっしゃる時に日本の学科の勉強はどうなさっていらっしゃいましたか」というご質問です。

笠原 毎週土曜日に補習校に行くといった形で…補習校では国語しかなかったのですが、その国

語で教科書を読んだりとか、日本の状況についていくために新聞の切り抜きを貼ってその要約とかをしたりという勉強はしていましたが、その外の教科におきましては、イギリスの補習校では国語しかやっていなかったもので、全く日本の勉強はしていませんでした。

司会 それで帰ってきて編入されて、日本の高校で勉強についていくことは大変ではありませんでしたか、国語以外で。

笠原 私の場合、理数系がすごく苦手で、編入した学校では数学を高2からやらなくてもよかったのです。地理とか歴史とかが好きだったのですが、やはり高2から入ってしまったために、例えば覚えなきゃいけない量がすごく多くて大変でした。また英語も帰国だからできるというのではなくて、私は中2の最初のほうで行ってしまったので、日本で習う英文法を向こうで全くやってこなかったため、英語のテストでも結構苦労がありました。

司会 ありがとうございます。では、次に針間さんにもう一度、現地校の生活についてのご質問ですが、「現地校の1日のだいたいのスケジュール、クラブ活動とかランチタイム、宿題の状況などをお教えてください」ということです。

針間 アメリカの高校の場合は、始まる朝がとても早くて、だいたい7時半にはもう1時間目が始まっているという状態です。ですから、家を出るのがスクールバスですと、7時すぎとかそれぐらいになるのですけれども…。だいたい1日に7時間、授業があって、途中で昼休みがあって、僕の学校は生徒の人数が多かったので、ランチタイムが「Aランチ」と「Bランチ」の二つに分かれていて、それぞれの時間にランチルームに行って食べるという感じでした。学校が早めに始まるおかげで、終わるのもすごく早くてだいたい午後2時位にもう終わってしまって、あとはほとんどやることがないのですけれども…。2時に終わってその後、クラブ活動などをやるという形になります。クラブ活動は、例えば僕がやったのは、春がテニスで冬の間が陸上でいろいろシーズンによって分かれたりしています。宿題は、最初はやっぱりとてもすごく多く感じると思うのですけれども、最初はできなくて当たり前なので、「全部やろう」とかそんなに心配する必要はないと思うのですけれども…。僕も実際、始めはグレードCばかりで、「これはいかん」と思ったのですけれども、だんだんやっていくうちに上がっていくものなので、そんなに最初から「全部完璧にやろう」なんて思わない方が良くないかなと思います。

司会 それから、針間さんにあと二点続けてまたご質問しますけれども、「すべての授業をESLで受けることができるのでしょうか」。それから、「持参していくと良い参考書、本などありますでしょうか」。

針間 ESLは、僕がいたときにあったクラスはまず、「US History」というアメリカの歴史、「NSL Government」というアメリカの政治、そしてあとは「Biology」という生物学。確か僕が卒業した後に、世界史の授業もESLの先生がやり始めたという話は聞いたことあるんですけど…。だいたいそんなところですよ。数学とかあとの授業はESLではやってなくて、普通のアメリカ人の出る授業に出ることになります。

(持参すると良い辞書類についてはパネルディスカッションの最後に掲載いたしました)

司会 では次に林田さん、ご質問ですが。「お父さんとして、お嬢さんたちにどのようなフォロー

一をしてあげましたか」また逆に、「どのようなことをしてあげれば良かったと現在思われていますか」という2点のご質問です。

林田 どちらかといいますと放任主義で、特別フォローといいますか、子供たちの教育のことで口をはさむようなことはしなかったんですが…。ただ、家庭の環境作りには気を配ったつもりです、できるだけ子供たちが勉強に支障がないように。それと、家族でできるだけ一緒に話す、機会を見て「学校のこと」とか、「今どういうことを勉強しているのか」とか、そういう話題を取り上げて、子供たちの話をよく聞いて、悩みがあるようであれば、僕らでアドバイスできるところはアドバイスしてはいたけれども…。特別「ああしろ、こうしろ」と言って子供を引っ張ったような記憶はございません。できるだけ話を聞いてあげることですね。それと、学期末になりますと、たとえばこの子はどんなことに優れていて、どういうところができないとか、気になる科目があれば、教科ごとに学校の先生の方から「今、娘さんはこういう状況です」とか、「もっとこういった勉強をしたほうが良いですよ」という話がありますから、その辺はできるだけ状況を掴むようにはしていたつもりです。

司会 もう1点、「これをしてあげれば良かったな」と、「今考えてみて、これはちょっと足りなかったかな」ということはありますでしょうか。

林田 そうですね。もうどちらかという、家内に任せっきりで、父親として不甲斐なかったんですが…。勉強ということよりも、できるだけ週末は家族でどこかに出かけて行くとかですね。それからヨーロッパですからいろいろ美術館とか、音楽会とか、日本では経験できないようなイベントとかございますので、そういうのはできるだけ家族で…もっと出かけて行けたらよかったかなと思っております。それなりに行ったつもりですけれども。

司会 ありがとうございます。では、続けて松本さんにたくさんご質問がきておりますので、一つずつお聞きいたします。まず、その一。「現地校やインターナショナルスクールへ通学する場合、学年を下げて勉強することが多いと聞いておりますが、元の学年に戻るのはどのようなタイミングで行われているのでしょうか」というご質問です。

松本 今のご質問ですけれども、一応高校段階と限ってアメリカで言いますと、アメリカの高校の卒業というのは、単位制です。必修科目とトータルの単位数がいくらかということがありますので、日本の学年に比べて学年を1年落とされたとしても、たとえば単位をたくさん取って…サマースクールで取ったり、エクストラで取ったりしてやれば、キャッチアップして日本の学齢と同じように卒業することも可能だと思います。ただし一つお断りしておかなければいけないのは、アメリカの学校はスクールディストリクトー学校区ーという、そういう小さなユニットですべてのディシジョンを下しますので、今言ったのが全米どこに行ってもそうかという、決してそういうわけではありません。ですけれども、基本的には単位制ですので、「キャッチアップして、小学校、中学校とは違って高校の場合は、追いつこうと思えば追いつけます」ということですよ。

司会 では、次が、これはかなり重要な問題を含んでいるご質問だと思いますけれども、「優秀な帰国子女ばかりでなく、カルチャーショックを受けてしまった子供、それからつまづいてしまった子供の実態やケアの仕方について」のお問い合わせです。

松本 つまづいてしまった子供、まあ、ここにおられるのは皆優秀なお子さんだと思うんですけども。現実問題として、今、もし私がそういう子に出会ったとします。まあ、そういう子、実はたくさんいるのですけれども…。私が個人的にそういう子を指導する時には、とにかく今から遅れているものを全部取り戻そうと思っても無理だと。だから、取りあえず、はっきりこの場ですから言いますと、大学入試に帰りたいのであれば、「TOEFLで英語ができるということを見せなさい」。現実問題として、日本の大学の先生が現地校の成績を全部並べて、中の評価を、記号で書かれたものを全部評価してわかってくれるかといったら、たぶんわからないと思う。だから、もしそれで何とかチャンスをつかみたいと思うんだったら、少なくとも英語だけでも…それも「ダントツにやれ」と言っても無理でしょうから、「日本の子よりはちょっとならできよ、というところをとにかく見せなさい」ということで、そういう環境作り、そういう指導をしてやる。それが今のところ、直接そういう子供に会ったら、唯一の方法じゃないかなという気がします。

司会 次に、「親としてどのように、またどこまで子供の学習の手助けしてやればいいのか、教えていただきたい」。

松本 難しいですね。長女が7年生の時に、日本から友だちが来て一杯機嫌になって、娘に「おまえ、英語の本を持ってきてみろ」と言いました。すると娘が素直に持ってきました。パッと開けて…開けたところが悪かったのですよね。シェークスピアが載っているのですよ。私も、ものの10秒位だったと思うけれど、パタッとふたをして、「がんばれな」と返したのです。（笑い）先ほど紹介の中でもありましたが、私自身もちょっとアメリカの大学に行ったりしましたので、たとえばアメリカの数学であれば高校卒業するぐらいまで、英語でも日本語でも見れると思うんですけども…。はっきり言いまして、駐在員の方で来られた方で、高校生の勉強をテキストで…一般的な話としては別ですけれども、テキストの勉強を面倒見られる人というのは、もういないと思います。だから、そういう無謀なことはやめて（笑い）、そんなことしたら延々と時間かかるばかりですので、それよりは、先程例に出ていたように、家庭教師とか、もうしっかりお金を稼いでいただいて（笑い）、サポートする環境作りをするというふうにまわっていただく。できれば、それぞれのところで、日本語でサポートしてくれる人をですよね。先ほど「日本語で生物の参考書を見ながら英語の生物を勉強しました」という話が出ましたが、実際は日本の高校生でおわかりになるとは思いますけれども、日本語の生物をぽんと与えてその人がそれを全部わかっているかということ、決してわかっているわけじゃないんで。だから、日本語で何かサポートしてくれる人を見つけてあげられれば最高だと思います。

司会 次に、「日本で学習している子供が、赴任先の外国語をパソコンで学んでおくことが役に立つかどうか。内容、それから取り組み方にもよるとは思いますけれども、効果の上がるパソコン利用の学習方法について、もしご存じでしたら伺いたい」というご質問です。

松本 私もちょっとコンピューターをやりますので、「効果の上がる」というところは延々と話が続きますからはしりますけれども。高校生で言いますと、基本的には、書かれた英語になるべく接するようにしてもらいたい。自分が興味あるのであれば、パソコンであろうと小

説であろうと何でも結構ですから、辞書引き引きでもいい、興味があるものだったら自分でも必ず真剣になって読みますから…。そういう、学習言語という意味で、書かれた英語とにかく接する機会をどんどん作っていただく。それであれば、コンピューターを使っていたいても、もう全然問題ない。ただ、ちょっとだけ言いますと、コンピューターを使っているのは、最近言語で、話し言葉、インターアクティブなどが相当出ていますので…昔はテープなども聞くばかりでしたけれども、最近はやべったものも分析してくれて、というのが出ていますから、そういうものを、具体的に良いものがあれば、積極的に使っていただく。高校生に関して言うと、「とにかく英語を読むこと」を奨励してください。

司会　ここで、松本さん個人への最後のご質問ですが、「アメリカの中学、高校生活で家庭教師もつけずに何とか生活してきました。空白—おそらく知的空白という意味だと思いますけれども—空白というものは帰国後も続き、社会人になってからもその空白は埋めることはできないと思います。明らかにできてない部分が現在もあります。社会生活を営むにあたって、その空白はどうしても埋めなくてはならないものではないのでしょうか。どのようなマイナス点がありますか」。

松本　ちょっと言葉を整理しますと、私がさっき知的空白という、ブランクになる部分ですね、その部分と申し上げたのは、ちょっと例が悪かったかわかりませんが、「Governmentで、何を勉強して何を覚えているか」ということではないのです。これは、実は帰国子女で、大学入試で出されたりすることもあるから、よくわかりますけれども、実際に例えば本を読んで「何が書いてある」ということで、ディスカッションしようと思っても、一言も出てこない子がいるんですよね。この思考のプロセスというのが、たぶん私が思うのには、高校生になっていきなり出ることはないと思います。今、アメリカでは「9才になったら本を読んで勉強するんだ」ということで、読書にすごく力を入れていますが、たぶん、そのお子さんのことについては、そのレベルまで、その時代までずっと遡っちゃうのじゃないかなと思うんですけど…。高校生のレベルで言うと、単純に何かを聞くと現象面だけ…たとえば、「日米の違いを言いなさい」と言うと、「あっちは赤でこっちは白だ」。「何故なの、何がそうなの」と言うと、わからない。ですから、いろいろなことを文章で書かせてディスカッションしたりする、そういう意味でのトレーニングですよ。私が今言うのはあくまで高校生のレベルでやれることで、今のご質問にあったように、社会に出てそれぞれやっておられるということであれば、たぶんご本人がそれは一番気付くことであるし…。たかだか18歳前ですから、高校生は、その後ずっと時間をかけて、自分で仕事の中で実際にやらなければいけない部分で、真面目に取り組んでいってもらうしか、方法はないのじゃないかなと思います。だけれども、高校生の間にそういう状況を作らないようにしていかなきゃいけないというのは、自分自身で今、海外で高校生に直接に教えていて一番感じることで、先ほど強調させていただきました。

司会　ありがとうございます。では、個人質問最後に藤澤さんに伺います。「一時部屋に閉じこもったと話されましたが、そこから抜けるのにどのようなになさったのでしょうか」。

藤澤　部屋に閉じこもったというか、それは例えでして、要は落ち込んでしまったと、そういう

経験がありました。そういう時に親がいれば、ある程度方向付けというのをしてくれるかもしれないし、してくれたと思うのですけれども、そういう存在がいなかったということで…。そういう時に、今考えると理想的なのは、まわりの寮の先輩とかあるいは友人とか、そういった人たちとどんどん交流して、自分の価値観というか視点を広げることが大切だと思うんです。それができなくて、私の場合は、趣味とか、絵を描いたりとか、あと一応大学が附属だったんですけれども、そのためにいろいろ勉強しなければいけなかったのも、そういった勉強をしたりとか、そういうことで紛らわせていたというか、そういう形で抜け出したと思います。

司会 ありがとうございます。これで一応個人は終わらせて、全体の質問にいきたいと思いますけれども。その前に先程松本さんが「お父さん、お金をたくさん稼いでください」と、おっしゃったのですけれども、お金のことに関しては「行くも地獄、残るも地獄」というか…お金に関してですよ。たとえば寮にしてもインターに行くにしても、大変なお金がかかります。これは、先ほど申し上げた資料を見ていただければわかると思いますが、林田さん、「企業にその辺のことはフォローしてほしい」とか、そういうことはいかがでしょう。

林田 確かにですね、大変な金がかかるわけですが、デュッセルドルフのインターを例に上げますと、その資料にも書いてありますが、一人あたりの年間の授業料は、26,000 マルクです。それは寄付金も若干含まれておりますけれども、当時円に換算すると、だいたい平均すると1 マルク=80 円台の感じですから、210 万円ですね。大変な金額なんですよ。そういうことで、会社の補助がないとやっていけないというのが実状だと思います。それ以外に、先程から話が出ていますけれども、英語力が日本の大学に入る場合、問われるわけですね。TOEFL とか SAT ということで、英語の勉強もしないといけないわけです。それで非英語圏の子供たちですと学校以外に、まあ皆さんおっしゃっていましたが、そのための教室に入ったり、夏休みの休暇を利用してわざわざ語学の特訓のためにアメリカにサマースクールに入ったりとか、そういったことで、費用もかかるわけです。そういうことで、派遣する側の企業の皆様をお願いしたいのは、教育事情が国によって、場所によってそれぞれ異なりますから、「その派遣先の教育環境がどうなのか」ということを十分事前に調査していただいて、そこにあった教育手当のあり方というのですか、そういったものを是非考えていただければと思います。

司会 ありがとうございます。現地校に行けない、インターしか行けないという地域もあります。インターと現地校とでは、やっぱり金銭的に違うと思いますし、英語圏の場合と非英語圏の場合でも違うと思いますし…よろしく願いいたします、企業の方。

それでは、全体的な質問に入りたいのですけれども、皆さんに答えていただく時間がないかもしれないので学生さんたち、手を挙げてください、積極的に。(笑い)では、「高校卒業後に、現地の大学に行かないで、日本の大学に進学したのはどうしてか」という質問ですけれども、いかがでしょう。はい、針間さんお願いします。

針間 「なぜ日本の大学を選んだか」ということですが、実際に僕は3年しかいなかったということが一番大きな理由です。今でも英語に関しては、まだまだ不満で、「もっと英語

をできるようにになりたい」という気持ちを持っているぐらいで…。普通の生活自体は支障ないですけども、もっと上のレベルを見ると3年じゃちょっと…アメリカの良いと言われていた大学に行くのは難しい。あと、日本の大学というのは、学校にいる生徒が自分の同年代しかいない、つまり大人になって日本の大学に入るというのは難しいことだと思うんで。その点、アメリカの大学というのは、別にいつでも入れるというか、別に大人でも平気で授業受けていますし。まあ、こういった理由です。

司会 小林さん、いかがですか。

小林 自分の選択の中では、「日本か海外かどっちか」という時に、「一応日本人だし、大学ぐらいは日本にいて、その後また海外に出ようか」という位の考えしかなくて…。でも、できるだけ英語を使えるような環境にいたかったので、英語の授業の充実している大学を選んだつもりですけども。それはそれで良かったなど。

司会 ありがとうございます。では、皆さんに伺いたいのですけれども。「テレビ、ラジオは初めは何を言っているのかわからなかっただろうと思います。日本に居た時より、テレビ、ラジオの時間が減り、その分勉強の時間が取れましたか。テレビ、ラジオがわかるようになったのは、どれ位経ってからですか」ということですけども。テレビ、ラジオがなかった分だけ勉強の時間が増えましたか。笠原さん、いかがですか。

笠原 日本に居た時は、テレビというのは1日1~2時間位は見ていたと思うのですが。その時は私はクラブ活動で忙しかったので、あまり夜家にいる時間がなかったので、日本に居る時もあまり見ていられなかったのです。イギリスでは、チャンネルが4チャンネルしかなくて、もちろん理解できなかったというのもあったんですけど、日本だとほんとに視聴者が好きそうな番組をたくさん考えてあるのが多いので、こっちも見er気になります。イギリスのは、古いドラマ番組とかあまり子供が好きそうなのではなくて、中高年が好きそうな番組とかが多かったのもあって(笑い)、あまり見る機会もなかったし、見たいと思わせる番組が日本に比べたら少なかったんじゃないかと思います。ラジオのほうは、音楽を提供してくれる番組というのを勉強しながらちょっとバックミュージック程度に流したり、そういうことをしていたのですが…。あまりテレビとかラジオに夢中にならなかったというのもあったし、やはり100%わかるようになるというのは、とても難しいと思いますし、GCSEをやっていたときは科目数も多く、宿題が多く、やるしかないという環境にあったので、そういう「テレビやラジオがわからなかったので、勉強を多くする機会が得られた」ということは、別に特になかったです。

司会 ありがとうございます。では、次の質問です。これは5人の方々、ぜひ答えていただきたいんですけども、「日本人とか、日本についての見方に変化はありましたか」ということです。藤澤さんもお小さい時アメリカにいらして、その辺がどう影響しているか、日本とか日本人を見るときに。これは、じゃあ簡単にチャッチャと行きたいんですけども。順番で、藤澤さんから良いですか。

藤澤 はい。私は小学校1年生の頃から小学校の6年生まで、足掛け6年位行っていました。それで日本に帰ってきまして中学に入って、最初はすごく馴染みませんでした。日本人そのも



のに対しても、ちょっと馴染めない部分もありますし、日本の学校の制度というか習慣というか、そういったものに対しても馴染めなかったというのがあります。たとえば、クラスで何か行事をやる時とか、そういった時というのは、日本人というのとはすごくまとまって行動するというか、まず「和を乱さない」というのがあったので…。そういう意味では、アメリカでは非常に自由というか、自分で自律してやるというか、そういった考えがあったので。その時は小学校の頃だったので、もっと大人になればそういった自律するということは、できると思うんですけども、逆に言うと小学生でやりたいことをやっているとはそれはただ、自分勝手なことになるというか…。そういう意味で、日本に帰ってきた時に、ちょっと周りと一緒にうまくいかなかったということがありました。

司会 ありがとうございます。じゃあ、高畑さん。

高畑 私は、小学校6年間ベルギーにいたんですけども、そのときは特別ベルギー人たちに対して「この人たちはどういう人だ」という考えは持っていなかったんですが、日本に帰ってから、やはり日本人は集団意識が強いなというのを感じました。あと、日本人ということで、ベルギーでは特別視された記憶があまりないんですけども、日本では、外国人を特別視する傾向があると思います。

司会 はい。では、小林さん。

小林 日本の小・中学校で、過ごした時はそんなに感じなかったですけども、一回海外に行って帰ってきて大学で生活を送ってみると、何というか人間関係が嫌になるんですよ。「何でこの人は、こんなちっちゃいことにこだわるのだろう」とか、高校の時には全然問題にならないようなこと、つまり海外で生活していたら全然問題にならないようなことが、日本だったらやっぱり問題になって…。要するに何というか、集団生活が初めにあって、「和を乱す」というか、和を乱すまではいかないですけども、ちょっと違ったことをしようとする、その部分を突かれて何か言われるのが、最近になってやけに感じるようになって、「ああ、嫌だな」と思ったことはあります。

司会 はい。では、笠原さん。

笠原 私も皆さんがおっしゃったことと同じように、日本はすごく和を大切にすることに対して、イギリスでは個性を大切にすることでも思ったんですが…。その外の意見を申し上げるとすると、日本からイギリスに行ってから思ったのはその授業形態で、日本では先生が教科書に沿って黒板に書いたりとか一方的に進める授業が多いですが、イギリスで特に英語の授業では、ディベートとかプレゼンテーションというのが多かったので、自己を表現する場が与えられているということが、日本とは違うと思いました。

司会 はい、ありがとうございます。じゃあ、針間さん。

針間 外に出てみると、日本にいた時に気付かなかったような点がいろいろ見えてきて、それは日本の良い点、悪い点あるんですけども…。やっぱり僕はアメリカがもう、大好きになってしまったので、やたら日本の悪い点ばかり目についてしまうんですけども。「なんでこんなに人が多いんだ」とか、「どうしてこんな、何でも評定されるんだ」とか「なんでみんな同じ考え方なんだ」とか、いろいろそういうことあるんですけども。まあ、逆に良い点

とすると、やっぱり改めてアメリカに行って思ったのは、「日本の食文化というのはすごいな」ということです（笑い）。僕は特に、ホームステイしたのですが、食事は正直言ってひどいもので、日本でいうジャンクフードばかりだったんですけど…それを食べるたびに「日本というのは食文化すごいな」と、改めて感じました。

司会 ありがとうございます。今、良いことは食文化だけですけども。（笑い）あの、もうちょつと何かないですか。（笑い）

針間 日本の良いところですか。

司会 はい、はい。

針間 そうですね。日本の良いところは、やっぱりあのう…何だろう。（笑い）やっぱりあの、約束とかそういうものをきちっと守るとか、そういうところはあります。アメリカ人というのは、何かどうも約束に関してはあんまり…まあ守る人もいるんですけど、ちょっとルーズなところがありますね。あとは、日本の良いところは規則正しいとか…まあ、そんな位ですかね。（笑い）

司会 あの、ほかの方で言い忘れたことはないですか。じゃあ、次に行きます。「帰国子女は必ずしも国際人になるとは限らない、と主張する人がいますが、この考えについてどうか」ということで、「国際人に対する自分の考えを言っていたらうえで答えてほしい」というご質問なんですけれども。ええっと、指しちゃっていいですか。それとも手を挙げていただきましょうか。ええ・・・でも指しちゃいましょう。小林さん、ちょっと自信がありそうな顔していらっしゃいますが。（笑い）

小林 「国際人というのはどんななのか」、自分の中でまだ、はっきりした考えというのはないんですけども。取りあえずは第一条件としては、相手を理解してあげられることかなあと思っています。「自分は日本人だから、外国に行ってもこういう形でやらなくちゃだめなんだ」とかいうのじゃなくて、相手のことも、「あの人はなに人で、こういう考えを持ってるんじゃないかな」と思ったうえで、それと協調して「自分はこうだ」とか、じゃあ相手がそう言うてくるんだったら、「なるほど、そうですか」というふうに、お互いに取りあえず理解できる…まあ理解できるというのも、お互いを認めるといふか、そっちを鵜呑みにするというわけじゃなくて、「なるほどなるほど、そうなんですか。私の考えはこうですよ。あなたはどうですか」と、そこで何ていうか、議論ができるのが国際人。要するに一方的に相手に自分の考えを押しついたりするのじゃなくて、相手のことを考えて、相手もこういう事情があるんだから、「ああ、なるほどな」と思ったうえでの、自分を主張できるのが国際人なんじゃないかなと、今考えているわけですけども。「帰国子女は全員が国際人にはなりえない」ということは当然のことで、「帰国子女だから、あの人はアメリカナイズされている」とかそういうことも、たまに言われたりすることもあるんですけども…。まあ、どうなのでしょう。よくわかりませんが、「帰国子女＝国際人」というのはまず成り立たないことは、自分の少ない経験の中からは言えることだと思います。

司会 ありがとうございます。ほかにどなたか、この件に関して。（藤澤、手を挙げる）はい、お願いします。藤澤さん。

藤澤 私の思っている国際人というのは、相手と自分の違いをわかってあげられる人、そういった要素がすごく大切なんじゃないかなと思っています。「帰国子女は必ずしも国際人になれるかどうかはわからない」というのは、私もその通りだと思っています、やっぱり日本にずっと暮らしていらっしゃる方でも自分の日本人としてのベースを持っていて、それで相手を思いやる心というか、相手を理解しようというそういう心、そういうのがあれば、国際人になれるんじゃないかなと、僕は思っています。ですから帰国子女で、たとえば「幼稚園の頃にヨーロッパに行き、それから小学校をアメリカで、そして高校に入って、また違うところに行った」というふうに、世界中飛び回っているような人でも、必ずしも自分がベースとなるものを持っていないと国際人と言えないというか…多国籍人というかそういった意味では当てはまるかもしれませんが、それと国際人というのはちょっと違うんじゃないかなということで、逆に言えば、ずっと日本に住んでいても国際人になれるんじゃないかなと思います。

司会 ありがとうございます。これで質問に関する答えは一応打ち切りたいと思います。今日取り上げられなかったご質問をお書きになった方、申し訳ございませんでした。何れかの形で私どもの活動に生かしていきたいと思います。ではそろそろまとめに入りたいのですが、パネリストの方々に、時間制限ばかりで申し訳ありませんが2分位で、今の自分に高校生活がどのように影響しているか、また、これから先どういう風に影響して行くか、というようなことを最後に話していただきたいと思います。それから、これから海外へいらっしゃる方たちにエールでも警鐘でもなんでもかまいませんので、一言メッセージをお願いします。では針間さんからお願いします。

針間 今振り返ってみると、アメリカ生活は言葉では言えない位深い影響があったということは間違いないのですが、英語以外にもいろんな経験ができたということが大きいと思うんです。いま僕は大学でゼミ（研究会）には入っているのですが、アメリカ政治の勉強をしています。やっぱりそのきっかけはアメリカに行っていたことなので、そういう意味で影響はあると思います。また、来年就職活動なのですが、やっぱりまず考えるのは、海外、できればアメリカに行けるような仕事が良く考えているので、やっぱりそういう根本的なところで影響っていうのはかなり大きなものだったと思います。

これから行かれる方へのアドバイスとしては、最初は英語がわからないのはあたりまえなので、わからなければどんどん質問するという姿勢が大事だということです。別に質問したからといって「こんなこともわからないのか」と言われることは絶対ないですし、やさしくしてもらえと思うので、どんどん積極的にすべきだと思います。またそのためには、スポーツ活動などいろいろチャレンジすることが必要だと思います。特にアメリカの場合はそういう新しいことをやる環境が整っていて、日本のお父さん方は羨ましがると思うんですが、ゴルフでもだいたい2000円ぐらいで1ホール回れて、僕も学校が終わってから少しやったのですが、新しいスポーツなどをいろいろやってみることができる環境があります。ですからアメリカに行けるチャンスがあるのなら、いろいろたいへんなこともあるかもしれませんが、是非行ってみると良いのではないかと思います。

司会 ありがとうございます。では笠原さん。

笠原 まず海外生活で私が得たものということですが、他の外国でもそうだと思いますが、イギリスでは、自己主張しないと相手に何もわかってもらえないということもありますし、自分の存在自体も認めてもらえないことが多いのです。ですから英語が流暢でなくても、英語は苦手じゃべれないという環境にあっても、なんらかの形で自分を表現するしかなかったのので、結果的に積極的になったと思います。また、難解な問題が毎日起こっていたので、過ぎてしまったことは後悔せずに、常に現時点で自分が何をしなくてはいけなくて、何を必要とされているかを最初に冷静に考えて、前向きに行動できるようになりました。それは大学生活でもプラスになっていますし、これからの生活でもなんらかの形でプラスになっていくのではないかなと思います。

アドバイスということですが、特に学校選びということについて言いますと、同じクラスに日本人がいると、先生がその人にサポートを全部お願いしたりして、結局英語をしゃべるよりも日本語でまずその人と会話をしたりすることが多くなってしまっても思うので、学校内に日本人が数人だけいるような学校を選ぶのが良いと思います。また日本人が全くいないというのではなく、あるいは、いま日本人がいなくても過去に受け入れた経験があって日本人のことをある程度わかっている学校を選んだ方が良いとも思います。また、渡英してからすぐ GCSE コースを勉強するのは本当に大変なことだと思いますが、すぐに諦めるのではなくて、科目の選び方を考え、例えば歴史や地理ではなくて、理数系の科目をとったりする選択など、先生と綿密にコンタクトをとり、苦手なところをサポートしてもらうことで合格に結びつけることは可能だと思います。諦めずにがんばって欲しいと思います。

司会 ありがとうございます。いま学校選びのアドバイスもいただきましたが、元に戻って申し訳ないのですが針間さん、アメリカでの学校選びはどうか。

針間 僕は親に言われるままに学校へ行ったので、最初は何もわかりませんでした。父が前任の駐在員の方に ESL の体制が整っていることなどいろいろ聞いて学校を決め、その学校の近くに家を構えました。学校によって ESL も差があるので、そういう事情をよく知っている駐在員の方たちに尋ねてみるのが良いと思います。また最近インターネットなどもあるので、ホームページで学校を見てみるのも良いのではないのでしょうか。

司会 ご質問で、具体的に針間さんが住んでいらっしゃるところにこれからいらっしゃるという方がお二方いらっしゃるのですけれども、具体的なご質問は後ほど個人的になさっていただいてもいいですね。ではお待たせしました。小林さんお願いします。

小林 自分の高校生活は大学生活のベースでもあり、これから自分が社会人になる時のベースになると感じています。その時に体験した楽しいこと、いろんな国の人とあって、いろんな国の話を聞いたこと、そういったいろんな体験が、これから自分の目標、将来の夢である「海外で仕事をしてみたい」ということに繋がったと云えるわけで、大変有意義な高校生活であったと思っています。これから行かれる方へのアドバイスですが、とりあえず、何があっても極端に落ち込むとか、自分を追いつめないことが大切なのではないかと思っています。最初はわからないことだらけで、本当に右も左も後ろも前も塞がれた状態で、もう精神的にどうし

ようもないというふうに陥ってしまう人もいます。どうしていいのかわからなくなった時に、人間はがんばればなんとかなるという気持ちでやってきてもらった方が、最悪の結果は免れると思います。親御さんはそういう子供たちを精神的に支えてあげて、お母さんの役割も結構大事になってくると思うのですよ。やる気があって、本当にがんばれるお子さんなら問題ないのですが、たとえば海外に来たくないのに親に連れて行かれちゃったという時にどうするかということが大変だと思う。こんな学校行きたくない途中で言い出す人もいます。そういうお子さんの **motivation** を見つけるようなサポートをしてあげられれば、それが一番難しいのでしょうか、本人の問題ですから、そういうサポートをしてあげられれば良いと思います。

司会 ありがとうございます。親御さんへの希望はあとで聞こうと思っていたのですが、それも言うてくださってありがとうございます。(笑い) ただその **motivation** がない場合ってというのは本当に大変だと思うのですが・・・では高畑さんお願いします。

高畑 私が通っていた学校の場合は英語教育だけではなく、音楽にも大変力を入れていましたので、そういった利点もありました。イギリスに住んでいたからといって、将来英語関係の仕事に就くというのではなく、音楽関係の仕事をする人もたくさんいました。それから、先程も申しましたように、友達関係ですが、協調性を大事にするようになったというのがすごく大きな影響だと思います。それから子供にもそれぞれの性格があると思いますので、海外に行くからといって、必ずしも現地校、あるいはインターナショナルスクールに通うというのではなくて、私のように在外私立が合う人もいるので、子供の性格を考えたら海外での学校を選ぶと良いと思います。

司会 ありがとうございます。藤澤さんお願いします。

藤澤 高校は日本にいたのですがその経験でいいですか。

司会 はい、一人暮らしの知恵を身に付けてということ。

藤澤 知恵という程のことは別に身に付けなかったのですけれども・・・寮生活をして良かったと思う点は、第一に、少しは自分でものを考えて行動できるような大人になったかなということです。それから、初めて高校時代に家族と離れて生活することになって、親のありがたみ、家族のありがたみ、周りに人がいてくれるというありがたみが身にしみてわかりました。悪い点は、周りの環境ですが、私の場合、周りが大学生ばかりで高校のころから大学生の生活に合わせてしまったので、少し精神的に老け込んでしまったかな(笑い)ということがあります。寮でなかったとしても、たとえば一人暮らししている子供にとって、結果として良いか悪いかはなかなか言えないのですが、周りの影響は大きいのではないかと思います。親と離れて暮らす時にどういったことに注意したら良いかということですが、私が感じたこととしては、自分自身少し引きこもってしまった時期がありましたので、そういった時はいろんな人とできるだけ交流してあんまり自分一人で考えないようにするということがすごく大切だと思いました。逆に親はどういうことを子供に対してできるのかということ、やっぱり離れて暮らしているわけですから、いろいろな限度があると思いますが、常に「親は子供を見てあげているのだよ」というコンタクトをとることが必要です。電話やメールでも、手紙で

も良いからそういったコンタクトを頻繁にとってあげて、子供が「もういいよ」って言うくらい、しつこくしたとしても悪い方には行かないと私は思います。

司会 ありがとうございます。今、親のありがたみや、親にサポートして欲しい、また親が子供の性格をよく見て学校を選んで欲しいというお話をいろいろいただきました。私も時を昔に戻して、やり直したいという感じがするのですけれども・・・（笑い）。では親御さんの立場から、林田さん、これからいらっしゃるお子様、親御さんたちにメッセージとかエールをお願いします。

林田 うちの家族の場合も長女がちょうどこれから高校2年生になろうかという、非常に難しい時期に家族全員デュッセルに赴任したのですが、娘たちが向こうに行きたいとか行きたくないとか、そういう話が全くなくて、皆で海外に行くのが当然だというような気持ちで赴任したのを覚えております。ですから、そういう苦労はなくて、親として娘たちが「こういうことだから日本に残りたい」ということでの心配をした覚えはないのです。正直言って、特に上の子は高校2年生で行ったのですから、言葉の面も含めて、大変だったと思います。家族にそういうことを感じさせないくらい性格が強いところがあるのでなんとかこなしていったのではないかと思います。できれば皆さんいろいろ家庭の事情はあると思いますが、家族で是非行っていただきたいと思います。必ず子供たちは勉強以外に現地でいろいろな経験、日本でできないようなことをしますからそれは必ず将来大変な資産になるんですね、間違いなく。実際娘たちは今でも言っています、「本当に海外に行って良かった」と。下の娘は日本の大学に入ったのですが、今でもインター時代が懐かしらしく、機会があれば旅行したいと言っているくらい、本当に幸せな日々を送ったと思います。上の子は私の海外転勤が彼女の人生の転機になったのではないかと思います。周りの先生たちからも助けられ、イギリスの大学生活は、たまに学校の休みにはプロの先輩たちのアシスタントとしていろんな仕事もやりますし、世界中を飛び回って、非常に幸せな留学生活を送っているわけですが、これもワンクッションとしてデュッセルドルフがあったからではないかという気がします。親として、こんなに嬉しいことはないですね。ですからいろいろ障害はあると思いますが、是非ご家族で行っていただきたいと思います。それからお母さんたちにもお願いしたいのですが、やっぱり家庭の安定が非常に重要なのです。ですからお母さんが元気で明るい家庭も明るくなるし、子供たちも力が出てくるわけですね。ですからできるだけお母さん方も海外へ行かれたら、その国の言葉を勉強していただいて、できるだけその社会へ入って、向こうでの生活をエンジョイし、元気なお母さんになっていただきたい。そうすれば必ず子供は親が考えている以上の力を持っていますから、チャンスさえ与えて親がサポートすれば、本当に頼もしい存在になるはずです。以上、私が皆さんにエールとして贈れる言葉です。

司会 ありがとうございます。「元気なお母さんになること」ですね。林田さん、お子さん方は海外へいらっしゃるの初めてだったのですね。

林田 そうです。

司会 はい、わかりました。では松本さん、最後のまとめを兼ねてをお願いします。親と子供たちにエールと警鐘を。

松本　まとめだということで非常に大変ですが、今皆さんのお話を聞いていて、私が感じたことを申し上げます。まずタイトルは「海外転勤、その時高校生は」ということですが。実際に高校生の時に、たとえば海外に連れて行くか、どういう生活をするか、どういうチョイスをするということを経験した大学生の皆さんがそれぞれご自分の意見を述べてくれたわけです。彼らが実際にディシジョンを下した時、短い人は今から2年前、もっと長い方もいますが、その時にお父さんお母さん方が一私も実は3人の娘がいて、親の立場ですが一どんな思いで判断をしたのだろうと想像していただきたいと思います。大学2年生、3年生になって、今だから彼らは自分たちの経験とか自分たちの海外生活を、ある意味では客観的に見られるようになり、このように話してくれたのでしょう。彼らが今から3年前にそういうふうと言えたかどうか分からないですよ。だって海外へ行く前には、親がどこかで親としてディシジョンを下さなくてはしょうがなかったわけですから。もちろんその時々海外の状況はそれぞれ違うと思います。皆さんもお手元の資料の中に、わたしも来る時に見せていただきましたが、3から6ページぐらいまでにいろいろ海外での経験のことが書いてあります。ちょっと残念なのは満足している人ばかりとは思えないのに、ネガティブな意見があまりにも少ないので、そんなに良いのかなあ、と思ったのですけども。

藤澤君が、「自分は日本に残った」。残るというチョイスをして親御さんもそれに納得した。逆に海外に高校生を連れて行く人もおられる。どちらにしても、子供たちがその場その場で一生懸命やっていたら、結果が良いから、悪いからではなくて、先程から大学生の方たちが共通で言っているのは「経験」ですよ。

林田さんの娘さんたちも海外で非常に良い経験をしたわけです。「経験」というのは、日本の経験とアメリカの経験をどちらもさせるということは、私は無理だと思います。そうするとお父さんお母さんは日本でずっと生活されて、日本の価値観を持っておられるわけですから、日本の考え方で日本の生活をさせるのか、それとも海外での経験をさせるのか迷います。今非常に、ある意味では感銘を受けたのですけれども、林田さんが最後に、お子さんたちが海外で現在活躍しておられることを「親として嬉しい」とおっしゃった。

実はここへ来る前にカウンセリングをしてきました。ある女の子がUCバークレーに合格したのですが、お父さんが承知しなくて、どうしても連れて帰るとがんばったのです。何ヶ月もかかったのですが、実は土壇場になってお父さんの本音がでました。それは「このまま残していくと、この子は日本人と結婚しない」。お父さんにとってはそれがキーワードだったのです。傑作な話ですが、それを娘さんに話したら、娘さんはいとも簡単に、「私は絶対日本人以外と結婚しないと一筆書いてあげる」と言いました。お父さんはそこまで言われたら打つ手はないわけですよ。それまでいろいろ理由をつけていましたが、それ一通もらったらお父さんは喜んで帰って、娘さんは、「まあいいよね、何年も先だもの」(笑い)というわけです。親としてのディシジョン、まだ子育てしている私がこういうのは可笑しいかもしれませんが、そのディシジョンをどうするかは親として決めなければならない。

私はいま海外で皆さんのお子さんを預かっています。子供たちと毎日格闘しています。その子供たちに、良い面悪い面がありますが、子供たちを見て思うことはひとつだけ、お父さ

んお母さんをお願いしたいことなのですが、「そこでディシジョンを下せない人は海外へ来ないで欲しい」ということです。別な言い方をするとどこかで一さっきのお父さんのお話ではないですが一日本人と結婚しなければだめだ、こういう風にしなければだめだ、あるいはメインルートはこうしなければいけないと思っていたら海外へ連れて来ないほうがいいですよ。親が一私も自分が親だからわかりますが一親が良かれと思って子供たちにしてやって、子供たちに「ひどいことしてくれた」と言われたら、親としてなんと答えますか。

私の長女は実は1歳半でアメリカへ連れて行きずっと日本語を補習校で勉強していました。実は20歳を過ぎてちょっと話をするのがあった時に娘に言われました。「お父さん、お母さんと二人で日本語の勉強をずっと補習校でやらせてくれたおかげで、今こうしてバイリンガルで大学に行き、すごくメリットがあった。それはありがとう。だけど大学で寮生活してみたら、自分はいかに人間関係が下手であるかがわかった。それはなぜかという、毎週土曜日補習校に行っていたから。友達とパーティーにも行けなかったし、遊びにも行けなかった」。私は何と答えたら良いのか、悔し紛れで言ったことは「良かれと思ってやったことだ。おまえは自分の子供でがんばれな」。もうしょうがないですからね。

先ほど言いましたが、生意気なようですが、海外に来られて一番苦勞する親御さんは、自分の価値観を持っておられない方です。「日本人学校に入れる」、「現地校に入れる」、それから「在外教育施設に入れる」、あるいは「日本にちゃんと置いておくのだ」そういうアイディアをしっかりと持っている方のお子さんは大丈夫です。子供は子供で高校生ですからいろいろ精神的な面もあるし、なんと言っても経験ですよ。AというものとBというものを両方一度に経験なんかできません。日本にいる子ももちろんそういう意味では日本の経験をしていると思います。しかしひとつだけ、今日の皆さんのお話を聞いていて、本当に海外に子供を連れて行って、自分でも良かったと思ったことなのですが、日本という殻から抜け出て、外の人いろいろな意見が理解できる。賛成する、反対するといこととは別に、理解をあげることができる。そういうものの見方、そういう対応や価値体験をして欲しいのであれば、それを親として身に付けて欲しいのであれば、是非とも海外に出してください。

先程「社会人になってどうするのですか」というご質問もありましたが、皆さんだって高校の時に勉強したことを全部覚えているわけではなのですから、勉強ができる、できないではなく、プロセスで経験してきたこと、そこで学んだことは子供たちの中に生きているわけです。針間くんや林田さんがおっしゃいましたが、海外での生活が2、3年であろうと、海外で生活したということが自分の心や考え方を動かし、先程「大学でゼミを選ぶのも、自分がそういう経験をしたからだ」と言われたように、大変大きな影響を残しているのです。これは海外に居ても、日本に帰ってきた子供たちを見ても感じることです。私がロサンゼルスで20年前に教えた子供たちが常にこちらの方を振り返ってきます。子供たちが多くの体験を持って、それをしっかりと身に付けてくれていること、そういう風に思える時、私は、先程林田さんがおっしゃったとおり、親として本当に嬉しいことだと思います。だからそう思えない人はしつこいようですけれども、海外に子供を出さないでください。親は勝手ですから、自分で良いと思っていることをするしかないですよ。子供のために良かれとでもうまく



機能しないこともあります。子供にとって大きな経験なのですから。

ちょっと横道にそれますが、最近子供たちのロサンゼルスでの結婚式の招待状がたくさん来ます。中学か高校の時期にロサンゼルスを経験した子供たちが、日本に帰り10年経って結婚の時をむかえ、「結婚という第二の人生はここでスタートしたい」という子供がたくさんいます。それ位に大きなインパクトがあったのだと思います。私の経験から言いますと、親として、とても苦勞はするとは思いますが、20年間見て、20年前に私が一番初め教えた子はもう35、6歳になっていますが、子供は25歳まで待つてください。25歳になったらお父さんと一杯酒を飲みながら、息子さんだったら小さな声でボソボソと「いろいろあったけど、親父、海外に連れて行ってくれありがとう」って言いますよ。それまでは子供たちはまさにstruggleしている渦中にあるわけです。それは決して海外経験をした子供たちだけではないし、日本の子供たちも同じことです。「英語や勉強の出来不出来、そういうこととは別に海外に行ってもう一回チャンスを作ってがんばってみよう」。こういう言い方をしたら非常に怒られるかもしれませんが、成績の悪い子ほど海外に連れて行けば良いのですよ。英語が大変なのはみんな当たり前です。さっき正直に言ってくれましたが、3年位では身につかないのですから。半年行けばペラペラになって帰ってくると日本では言われていますが、それはおしゃべりできるだけです。是非ともそういう意味では25歳、その先の子供たちの姿を、親としては夢見るしかないのじゃないですかね。林田さんのお話のように、「親の都合で連れて行ったが良かった」と言える日が来るのを楽しみに、毎日英語のできない子供をかかえて格闘するしかないし、あえて自分のディシジョンを親として下していくしかないのではないかと思います。

今日、わたしは本当にここで良い勉強をさせていただきました。フレンズの皆さんにも「ありがとう」と申して、終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会 本日はパネリストの皆様、貴重なお話をいろいろ聞かせていただきましてほんとうにありがとうございました。そして会場の皆様、長時間にわたりご静聴ありがとうございました。拙い司会にお付き合いくださいまして、これもまた感謝致しております。これを持ちまして、海外帰国子女シンポジウムを終了いたします。

## 資料

書籍名	内容	販売元	値段
英和数学 学習基本用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英米のテキストに頻出する数学用語 957 項目を選定</li> <li>・アメリカのSAT、イギリスのGCSE・GCE-Aでの必須用語をカバー</li> <li>・用語の具体的な使用例、解法もあわせて記述</li> <li>・高校生レベルに合わせた、わかりやすい解説</li> <li>・大学院留学試験GRE, GMAT受験にも対応</li> <li>・参考資料として、数学教育の日米英比較、カリキュラムを提示</li> </ul>	アルク	5500 円
生物英語 ハンドブック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語での文章、レポートの書き方を説明</li> <li>・実験用具の図解と名称を英語で示す</li> <li>・各種 illustrated dictionary などで、各部の名称を調べることができる</li> </ul>	培風館	2700 円
英和生物 学習基本用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英米のテキストに頻出する生物用語 1549 項目を選定</li> <li>・図やグラフを多用し、高校生レベルに合わせた、わかりやすい解説</li> <li>・アメリカ、イギリスの統一テストでの必須用語をカバー</li> <li>・学部・大学院留学生の基礎学習にも活用可能</li> <li>・参考資料として、生物教育の日米英比較、カリキュラムを提示</li> </ul>	アルク	6500 円
岩波生物学辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語以外の言語で勉強している人や、大学入学試験を控えている人に役立つ</li> <li>・巻末に英・仏・独・露語の索引があり、専門的な内容を調べるのに役立つ</li> </ul>	岩波書店	9220 円
英和物理 学習基本用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英米のテキストに頻出する物理用語 2210 項目を選定</li> <li>・英米の統一テストにみられる必須用語をカバー</li> <li>・関連用語を豊富に盛りこんだ解説</li> <li>・高校生レベルから学部・大学院留学まで幅広く利用可能</li> <li>・図やグラフを多用し理解を促進</li> <li>・参考資料として英米の物理教育カリキュラムを提示</li> </ul>	アルク	6000 円
英和化学 学習基本用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英米のテキストに頻出する化学用語 2376 項目を選定</li> <li>・英米の統一テストにみられる必須用語をカバー</li> <li>・関連用語を豊富に盛りこんだ解説</li> <li>・高校生レベルから学部・大学院留学まで幅広く利用可能</li> <li>・図やグラフを多用し理解を促進</li> <li>・参考資料として、英米の化学教育のカリキュラムを提示</li> </ul>	アルク	6500 円
化学英語を書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文英訳のポイントを説明</li> </ul>	培風館	2600 円

新版 新化学用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単語や化学物質等の和訳を調べるのに便利</li> <li>・英和、和英を掲載</li> </ul>	三共出版	3000 円
岩波理化学辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語以外の言語で勉強している人や、大学入学試験を控えている人に役立つ</li> <li>・巻末に英・仏・独・露語の索引があり、専門的な内容を調べるのに役立つ</li> </ul>	岩波書店	11000 円
理工英語小辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工学系英文を読んだり、書いたりするのに便利</li> <li>・単語や化学物質等の和訳を調べるのに便利</li> <li>・英和、和英を掲載</li> </ul>	三共出版	2000 円
理工学 ロシア語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・露和・和露を掲載</li> </ul>	三共出版	6000 円
英和欧州近代史 学習基本用語辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英米のテキストに頻出する歴史用語 791 項目を選定</li> <li>・英米の統一テストにみられる必須用語をカバー</li> <li>・関連用語を豊富に盛りこんだ、わかりやすい解説</li> <li>・高校生レベルから学部・大学院留学まで幅広く利用可能</li> <li>・歴史地図や年表を使って理解を促進</li> <li>・参考資料として、ヨーロッパの歴史教育・カリキュラムを提示</li> </ul>	アルク	5500 円
新編西洋辞典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A レベル試験、I B 試験などの対策として、高度な内容を求める人に役立つ</li> </ul>	東京創元社	9700 円

[CD-ROM 百科事典]

出版名	対応機種	内容	販売元	値段
世界大百科事典	ウィンドウズ 95/98/NT4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分野別検索と全文検索を同時に実行できるのが便利</li> <li>・情報リンクが簡単</li> <li>・83000 項目 7000 万字収録</li> </ul>	日立デジタル 平凡社	38000 円 (ベーシック版) 59000 円 (DVD-ROM 付プロフェッ ショナル版)
日本大百科全書	ウィンドウズ 95/98/NT4.0 (99 年初夏 Mac 版 発売予定あり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ画像が豊富</li> <li>・付属に国語辞典がつく</li> <li>・旧漢字を正確に表現している</li> <li>・13 万項目 9000 万字収録</li> </ul>	小学館	78000 円
エンカルタ 総合大百科 99	ウィンドウズ 95/98/NT4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界を飛行する「3D バーチャルフライト」や、遺跡や都市などを仮想探検する「バーチャルツワー」など工夫がたくさん</li> <li>・29000 項目収録</li> </ul>	マイクロソフト	15800 円 程度 (オープン価格のため)
マルチメディア 百科事典 マイペディア 99	ウィンドウズ 95/98/NT4.0 マイペディア for Mac (Mac OS 7.6 以上)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目で楽しむ百科事典</li> <li>・カラー静止画、動画、アニメ、サウンドなどにすぐれている</li> <li>・65000 項目収録</li> </ul>	日立デジタル 平凡社	10000 円

